2013 年度

活動報告書

Tokai University
Student Project Center
Activity Report

東海大学チャレンジセンター

東海大学チャレンジセンター
〒259-1292 神奈川県平塚市北金目四丁目１番１号
Tel ：0463-50-2504(直) Mail：challenge@tsc.u-tokai.ac.jp
Fax ：0463-50-2472 URL：http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/

2013年度チャレンジセンター活動報告書の発行にあたって

チャレンジセンター所長
梶井 龍太郎

髙野二郎学長による強いリーダシップによって2006年に設置されたチャレンジセンターは、「創設期」である発足当初の3年の間、新しく定められた「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」という3つの力の体得を教育目標として、初代大塚滋所長のもと、新しい組織とその教育目標を学内外に広く認知させることを目的として、学生によるチャレンジプロジェクトを開始し、併せて授業も開講された。また、文部科学省による競争的資金である現代GP「東海大学発USR型モデルの創出・実践」に採択されたが、これは、「USR（University Social Responsibility）型社会貢献モデル」を創出し、継続的な地域活性化を目指すというものであり、社会貢献活動を通したPBL教育（Project Based Learning問題解決型教育）を展開するというものである。このような教育センターの設置は当時としては新しく、先端的な取り組みとして評価される一方で、従来型の教育、学内組織との共存には大きな困難を伴った。

第2期の2009~2012年度は、「充実期」として位置づけることができる。ここでは、ライトパワープロジェクトのソーラーカーチームによるワールドソーラーチャレンジ連覇など輝かしい実績をあげるプロジェクトが出たほか、全国の校舎で特徴あるプロジェクト活動が展開され、参加学生は1,000名を越えた。また、授業科目の開講に当たっても、入門科目が学生の人気科目となり、特定プログラムとして「ジャーナリズム実践教育」が整備されるなど、学内での認知も高まった。しかし、確かな教育効果を感じながらも、その一方でそれを測る有効な方法を確定できず、チャレンジプロジェクトとクラブ・サークル活動、チャレンジプロジェクト参加学生と一般学生の就職率、離職率等の差異は明確でないままであり、全校舎でのチャレンジセンター科目の開講、コーディネーターの育成等未解決な問題も多く残った。

こうした状況を踏まえ、2013年度から2017年度までの5年間を第3期「発展期」と位置づけ、全学のPBL教育推進のための教育組織として、また大学組織改革のためのエンジンとしてのチャレンジセンターの活動を大幅に見直すこととした。具体的には、教育目標を従来の「3つの力」から、「4つの力」（2010年度より全学の中期目標と定められていた「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」）に変更し、イメージキャラクターである「リッキー」の普及に努めることとなった。また、プロジェクト参加学生数の目標値を3,000名とし、全校舎での科目開講を実現することを目標と定めたほか、PBL教育を推進するために、全学で実施しつつある教育改革、組織改革をさらに進展させ大学改革を実行するための中心的な組織であることが確認された。

この第3期の目標と定めた事項について、2013年度に実施、実現されたことは以下の通りである。

- **●4つの力を教育目標として、4つの力の広報・普及活動に努め、教育目標具現化のためのシンボルとしての役割を果たした。**
- **●プロジェクト活動参加学生数は、2013年7月1日現在1,729名となった。**
- **●全校舎での科目開講を実現した。**
- **●文部科学省「地（知）の拠点事業（COC事業）」採択のために、学長室とともに、「To-Collaboプログラム」の計画・立案にあたった。**

以上のように2013年度は、第3期「発展期」の1年目として概ね計画目標通りの活動実績をあげることができた。関係するすべての方々のご協力に心より感謝申し上げたい。また、この報告書に目を通すことで、プロジェクト活動、科目開講状況等チャレンジセンターの1年間の活動を確認していただき、今後についてのご意見をいただければ幸いである。

2014年3月

INDEX

2013年度チャレンジセンター活動報告書の発行にあたって …… 1
チャレンジセンターとは …… 3
チャレンジセンター運営体制・支援体制 …… 5
2013年度のチャレンジセンターの活動 …… 7
リーダー研修 …… 8
2013年度チャレンジプロジェクト活動報告 …… 9
【湘南校舎】ライトパワープロジェクト …… 9
スポーツ社会貢献プロジェクト …… 11
サイエンスコミュニケーター …… 12
東海大学学生ロケットプロジェクト（TSRP） …… 13
3.11生活復興支援プロジェクト …… 14
病院ボランティアプロジェクト …… 15
Music Art Project（MAP） …… 16
環境キャラバン隊 …… 17
キャンパスストリートプロジェクト（C.A.P.） …… 17
Tokai Formula Club …… 18
Beijo Me Liga …… 19
Tokai International Communication Club（TICC） …… 19
【高輪校舎】Takanawa共育プロジェクト …… 20
【熊本校舎】先端技術コミュニティACOT …… 21
メカトロマイスター …… 21
熊本地域プロデュースプロジェクト …… 22
【阿蘇校舎】阿蘇援農コミュニティープロジェクト …… 23
阿蘇は箱舟プロジェクト …… 23
【札幌校舎】福祉除雪プロジェクト …… 24
COC事業におけるチャレンジセンターの役割 …… 26
2013年度ユニークプロジェクト活動報告 …… 27
橋をかけるプロジェクト（湘南） …… 27
三保活性化プロジェクト（清水） …… 27
夢工房（清水） …… 27
YOYOGI Leisure Frontier（代々木） …… 28
三保活性化プロジェクト（清水） …… 28
ロボP（高輪） …… 28
海の森プロジェクト（清水） …… 28
プロジェクトコーディネーター・プロジェクトアドバイザー …… 29
チャレンジセンター開講科目 …… 31
FD研究会 …… 41
ミニセミナー …… 44
広告媒体物（ポスター・チラシ・パンフレット・フリーペーパー） …… 45
ニュースリリース（湘南校舎） …… 47
メディアー覧 …… 48
2013年度活動一覧 …… 49

チャレンジセンターとは

チャレンジセンターは多様な人々との関わり合いの中から「自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力」を身につけた社会に貢献できる人材を育てる教育プログラムです。

めまぐるしく変化する現代社会においては、グローバル社会で生き抜くための国際的な視野を養うことが肝要ですが、その一方で、自らが生活する地域において、市民の一員としてそれぞれの役割を認識し共生していくことはより重要なことです。そのためには、多世代が交流し、地域コミュニティの課題に関心を持ち、その改善に役立つ知識・スキルを体得することが必要とされています。こうした状況において、大学がその社会的責任を果たすために、積極的に地域に貢献することが求められており、東海大学は他大学の教育改革に先駆けて、「集い力・挑み力・成し遂げ力を身につけた社会に必要とされる人材を育成する」という教育理念のもと、2006年にチャレンジセンターを発足しました。2013年度はさらに建学の精神を具現化する一つ教育施策として設定した「自ら考える力」を含めた4つの力の育成に取り組みました。この「自ら考える力」は、創立者の思想を受け継ぎ、東海大学の教育の基本姿勢として根幹をなすものです。

2013年度は、チャレンジセンター開講科目（ジャーナリズム科目含む）を5校舎104科目5,405名が受講し、プロジェクト活動を7校舎42プロジェクト展開し、延べ1,729[a]名（チャレンジプロジェクト19件1,289名・ユニークプロジェクト23件440名）が参加しました。さらに、チャレンジセンターは年間を通じプロジェクトの目標達成と「重視する学びのテーマ」を積極的に実践した学生に対し、チャレンジセンターの活動理念である4つの力を体得したことを認める「修了認定証★」を授与しています。

チャレンジセンターはこれからも総合大学として多様な学部・学科における専門性と、社会的実践力を身につけさせる教育プログラムを連携させていくとともに、大学に求められている時代のニーズに柔軟に耳を傾けながら、東海大学が担うべきUSR[b]を果たしていきます。

a 2013年7月1日を基準

b USR（University Social Responsibility:大学の社会的責任）・・・チャレンジセンターは社会の現状と向き合い、社会的実践力を身につけた人材を育成する汎用性の高い教育モデルを創出することをUSRと捉えています。

東海大学が育む人材

チャレンジセンター

・プロジェクトコーディネーター（職員）
・プロジェクトアドバイザー（教員）
による支援体制 ※詳細はP6

多様な学部学科で学ぶ専門性

＋

社会的実践力を養うために東海大学が育成する「4つの力」

自ら考える力	集い力	挑み力	成し遂げ力
常に未来を見据え自らが取り組むべき課題を探求する力	多様な人々の力を結集する力	困難かつ大きな課題に勇気をもって挑戦する力	失敗や挫折を乗り越えて目標を実現していく力
学習力	コミュニケーション力	問題発見力	工程管理力
思考力	関係構築力	構想力	実行と継続力
探求力	アイデンティティ獲得	プランニング力	分析と修正力

理 論：チャレンジセンター科目／実 践：プロジェクト活動

社会が必要とする人物像

社会的実践力を身につけ、高い専門性で社会に貢献できる

プロジェクト修了認定★

チャレンジプロジェクトが以下の条件（抜粋）を満たし、プロジェクトコーディネーターによって1年間の活躍が評価されたプロジェクトメンバーに授与されます。

1 コーディネーターによる推薦

1年間のプロジェクトに積極的に参加し、また、その成果に貢献し「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を身につけたと認められる学生の推薦

2 チームとしての条件

・プロジェクト協議会へのプロジェクトリーダーの出席
・幹部ミーティングの実施(年9回以上)
・中間報告会（10月）および最終報告会（2月）での発表(P7参照)
・建学祭での発表
・応募要件のプロジェクトを実施するメンバー数を満たしていること
他5項目

3 個人としての条件

・振り返りシートの提出※1
・中間報告会・最終報告会への出席
・参加報告書の提出
・当該年度7/1現在プロジェクトに所属し、活動期間が9カ月以上であること
他2項目

※1 振り返りシート：プロジェクトメンバーは、各企画終了後に省察会を開催し、プロジェクトが設定した「学びのテーマ」を踏まえ活動を実施できたかを振り返るシートを作成します。（年3回）

チャレンジプロジェクト

・学生が自由な発想で企画・立案した年間を通じたプロジェクト活動
・大学職員によるプロジェクトコーディネーター、教員によるプロジェクトアドバイザーを配置
・メンバーが複数学科に横断して構成されていること
・参加人数が50名以上であること（湘南校舎以外は30名以上）

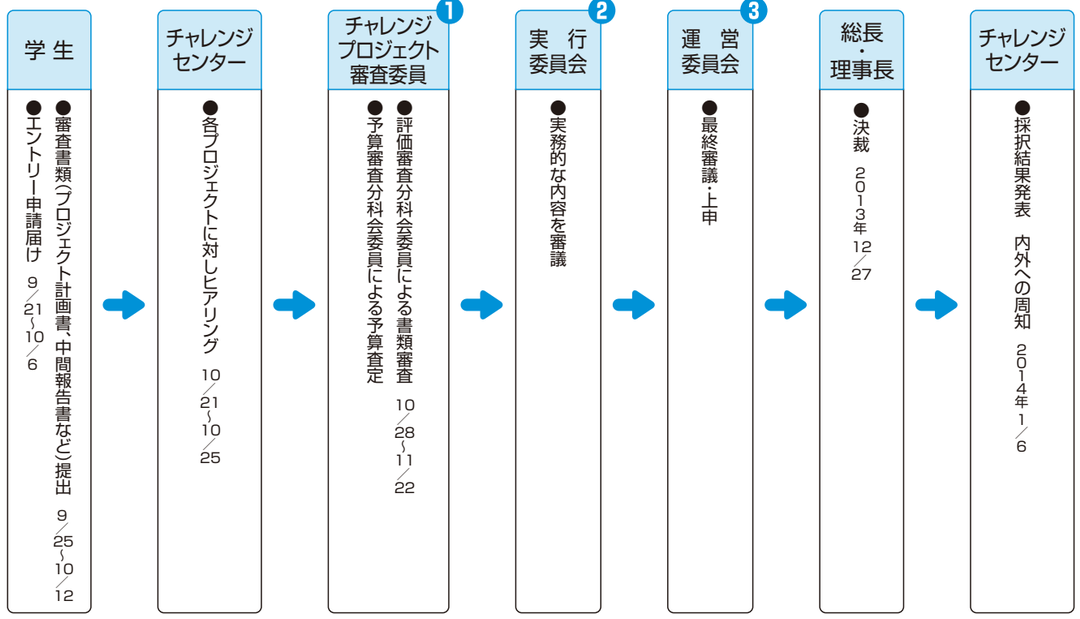
ユニークプロジェクト

・将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽的位置づけのプロジェクト
・少人数のグループ（10名以上）で構成
・学生からの希望があり、かつ、人員が配置できる場合はコーディネーターとアドバイザーを配置

チャレンジセンター運営体制・支援体制

東海大学では、チャレンジプロジェクト採択をはじめとするチャレンジセンターの事業計画や修了認定、チャレンジセンター科目に関することなどについて審議・決定を行う、チャレンジセンター運営委員会および実行委員会を設置しています。チャレンジセンターの取組みは、これら委員会の承認を得て実施されました。

◆チャレンジプロジェクト採択までの流れ



◆2013年度の会議開催と審議事項

	実行委員会	運営委員会	審議事項
第1回	5月10日（金）	5月20日（月）	・チャレンジプロジェクト支援金審査について
第2回	8月26日（月）	9月2日（月）	・チャレンジプロジェクト申請及び審査方法等について ・2014年度チャレンジプロジェクト募集要項について ・松前重義記念基金「2014年度ユニークプロジェクト」募集要項について
第3回	11月29日（金）	12月4日（水）	・2014年度チャレンジプロジェクト審査について
第4回	2014年 3月5日（水）	2014年 3月10日（月）	・チャレンジプロジェクト修了認定について ・チャレンジセンター所長賞について

❶ チャレンジプロジェクト審査委員

〈評価審査分科会委員〉
実行委員（チャレンジセンター所長、次長、推進室長を除く）、付教員、常任教務委員、常任広報委員による書類審査
（10校舎28名、うち教員10名、職員18名による）

〈予算審査分科会委員〉
事務課長、事務課（会計担当課長）、センター担当次長、チャレンジセンター推進室長

❷ 実行委員会

チャレンジセンターの活動に関連した課長で構成され、プロジェクトが活動するにあたり必要な環境整備等、実務的な内容を審議します。また、実行委員はチャレンジプロジェクト審査委員も兼ねます。

委員長：梶井龍太郎チャレンジセンター所長
副委員長：木村英樹チャレンジセンター次長、崔一英チャレンジセンター次長　**委員**：10校舎23名

❸ 運営委員会

チャレンジセンター運営に関した部長などで構成され、実行委員会での協議を踏まえ、チャレンジセンターの運営全体について最終的な審議をします。

委員長：田中康夫副学長　**副委員長**：梶井龍太郎チャレンジセンター所長　**委員**：学長室長、国際部長、研究推進部長、事務部長、入試センター所長、教学部長、教育支援センター所長、キャリア支援センター所長、教学部事務室長、チャレンジセンター次長

◆チャレンジセンターにおける各会議

・チャレンジセンターミーティング（月1回）（所長、次長、チャレンジセンター教職員）
・教授会（月1回）（所長、次長、チャレンジセンター教員、オブザーバーとしてチャレンジセンター職員、教学課員）

学生運営スタッフ

学生の視点から運営改善に向けた提案を行い、チャレンジセンター職員と共にプロジェクトの運営・サポートを行います。プロジェクト協議会の進行および議事録作成をはじめ、各報告会やガイダンスの司会、プロジェクト説明会の準備・運営などを務めます。

プロジェクト協議会

プロジェクト活動を円滑に推進するため、プロジェクト間の情報交換、チャレンジセンターからの連絡事項の伝達を行う場として、プロジェクト代表者の出席を義務づけ、原則として月1回開催。今年度は、全9回開催し、全校舎をTV会議システムで接続して実施。

（議長：チャレンジセンター推進室長、委員：プロジェクトリーダー・プロジェクトコーディネーター、司会進行：学生運営スタッフ）

チャレンジセンター組織

センター教員

所長	梶井 龍太郎（教養学部芸術学科）	
次長	木村 英樹（工学部電気電子工学科）	
次長	崔 一英	
主任	崔 一英	
	山口 勉	岡田 工
	岩田 伊津樹	園田 由紀子
		堀本 麻由子

チャレンジセンター推進室（職員）

室長	五十嵐 義和	
室長補佐	佐藤 多嘉雄	
係長	近藤 竜二	
	高橋 操	木村 直樹
	中西 健人	平島 滋義
	吉本 美陽	鈴木 絵理

付教員

河野 時廣	生物学部海洋生物科学科	中嶋 卓雄	基盤工学部電気電子情報工学科
齋藤 寛	海洋学部水産学科	福崎 稔	総合教育センター
杉本 洋文	工学部建築学科	森山 美紀子	外国語教育センター第二類
田中 孝幸	農学部応用植物科学科	富田 誠	教養学部芸術学科

プロジェクトコーディネーター

プロジェクト全体の進行状況を把握し、活動全般の相談役や提出書類の作成指導を担います。また、予算管理・工程管理に関する指導や、活動が困難な状況の時に円滑に進むよう学生にモチベーションを与える「縁の下の力持ち」としての役割を担っています。なお、コーディネーターは、チャレンジセンターが実施する複数の研修会の受講が義務づけられており、これは東海大学人事制度において「業務別研修」と位置づけられたオリジナルのSD※活動です。

プロジェクトアドバイザー

専門的知識または技能を持った教員が担当し、各プロジェクトに1名以上配置されます。主な役割として、プロジェクト活動に対して専門的な立場から指導・助言を行います。プロジェクトの活動を、より質が高く大きなチャレンジとするためには、プロジェクトアドバイザーの豊富な知識と経験に裏づけられたアドバイスが必要になります。

※SD（Staff Development）‥授業開発などの教員による「FD」に対し、大学職員として学生支援に必要な能力を高めるための研修会やミーティングなどの実施

支　援

支　援

支　援

プロジェクト活動

ものつくり系やボランティア系、地域活性系など学部や学科、そして学年の枠を越えた学生たちが意見をぶつけ合いながら、目標の達成に取り組んでいきます。

※詳細はP9～

教育プログラム

チャレンジセンター開講科目

従来の大学の授業とは異なる、学生自身に「気づき」を促すさまざまな演習を組み込んだ授業を通して実社会において自身がぶつかる様々な問題の解決方法を身につけていきます。

※詳細はP31～

2013年度のチャレンジセンターの活動

10/19 「2013年度チャレンジプロジェクト中間報告会」を開催しました

10月19日に湘南校舎8号館で開催しました。これは、各チャレンジプロジェクトの代表学生が地域の方々や学生、教職員らに、今年4月から10月までの上半期に全国各地で展開した活動の実績や成果を報告するものです。当日は湘南校舎のほか、札幌、代々木、高輪、清水、熊本、阿蘇の計7校舎をテレビ会議システムで結び、全校舎合わせて665名の学生、教職員が集まりました。

報告に先立ち、チャレンジセンターの梶井龍太郎所長（教養学部教授）が「箱根駅伝の予選会やソーラーカーの世界大会など、学生の皆さんの活躍が続々と伝えられて大変うれしく思います。今日はプロジェクト同士が学び合える貴重な機会です。積極的な意見交換や情報共有を通して、これからも活動がますます活発になることを期待しています」と激励しました。

続いて19のチャレンジプロジェクトの代表学生が、活動内容や今後の目標などを発表しました。「他のプロジェクトと合同で催しを行うなど、活動の幅を積極的に広げることができました」「取り組みを周知するために、チラシやインターネットなどを活用して一般の方々も参加できるような提案をしています」「地域の活性化につながる活動で社会的な視野を広げ、地元の方々との協力体制が強固になってきました」「一般の方々の関心を深めることができ、企業から表彰を受けることができました」など、活動推進の工夫や学んだことなどを紹介。会場では発表を熱心に聞きながら、メモを取る学生の姿も見られました。

なお、各プロジェクトの発表後には、「プロジェクト内でのモチベーションを上げるために、どのような点に工夫したか」「イベントを継続していく中で、学外に広げていくためにはどうすればいいか」など、他校舎間の学生とも質疑応答が行われました。

11/18 「第11回チャレンジセンターセミナー」を開催しました

11月18日、湘南校舎の松前記念館講堂で、前文化庁長官の近藤誠一氏が、「富士山世界遺産登録　その背景と経緯」をテーマに講演。登録交渉の舞台裏を紹介しながら、目的の実現に向けてあきらめずに挑戦することの大切さを訴えました。当日は学園の7校舎をテレビ会議システムでつなぎ、学生や教職員ら約350名が聴講しました。

近藤氏は、今年6月にカンボジアのプノンペンで開かれた「第37回世界遺産委員会」で、富士山と三保の松原が世界文化遺産に登録された背景と経緯について次のように解説しました。三保の松原の登録除外勧告を受けた日本の交渉団は、世界遺産委員会諮問機関（イコモス）の委員20名に対し即座にロビー活動を開始。富士山と三保の松原が一体となって日本人にインスピレーションを与え、浮世絵をはじめとする優れた芸術作品が生まれたことを訴えて、逆転登録を勝ち取りましたとしたうえで、近藤氏は「短時間で効果的なアピールができるよう戦略を練り、人脈を駆使して最後まで交渉し続けた結果です。日本人が持つ自然観や繊細な美意識が評価されたのだと思います」と振り返りました。

後半は、これらの交渉過程を踏まえ近藤氏は、東海大学が推進する「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の4つの力に即して、目的達成のためにするべきことを解説。「価値判断の基準をしっかり持って自らの言動に責任を持ち、長期的な人間関係を構築しておくことが重要です」と語りました。さらに、悲観的に準備して楽観的に実行し、常に次の手段を考えておくことや、明確な戦略や戦術を立て粘り強く交渉することの重要性を強調しました。

参加した学生は、「日本の交渉団が、最後まで気を緩めずに委員を説得し続けたことに感銘を受けました。簡単にギブアップせずに、どうしたら成功するかをしっかり考えて行動したいと思います」「戦略や戦術を持って交渉することの大切さを学びました。何事にも信念を持ってチャレンジしたいと思います」などと感想を語っていました。

2/5 「2013年度チャレンジプロジェクト最終報告会」を開催しました

今年度に採択された19件のチャレンジプロジェクトが、1年間の活動成果や課題、今後の展望などを発表する「2013年度チャレンジプロジェクト最終報告会」を、2月5日に湘南校舎8号館で開催しました。湘南をはじめとした9つの校舎をテレビ会議システムで結んで行い、全国で約570名の学生や教職員らが参加しました。開催にあたり、チャレンジセンターの梶井龍太郎所長（教養学部教授）が挨拶。その後、登壇した各プロジェクトの代表者はスクリーン上で写真や図表などを示しながら、制限時間内（質疑応答を含む10分間）での報告に臨みました。

なお最終報告会では例年、学生がその後の活動に生かせるように来賓を招き講評をいただいています。今回は、東海大学同窓会東京ブロック会長の宮原孝夫氏に加え、企業で人事や管理を担当している市川光昭氏（いであ株式会社）、石井祐吾氏（株式会社アビスト）、長安元和氏（株式会社マイスターエンジニアリング）、橋本紳司氏（株式会社トーブラ）にご参加いただきました。

報告会終了後には学生のプレゼンテーションに対して、「プレゼンテーションの際には、相手を考えて発表することが重要です。企業の面接でも同様ですが、相手の目を見て、原稿を棒読みするのではなく自分の言葉で訴えてください」「発表の態度が素晴らしくて感心しましたが、成果や目標は数値化するとよりわかりやすくなります」「多くの発表があって長時間にわたるので、スクリーン上での表現も工夫する必要があります。また、ほかとは違うパフォーマンスなども取り入れて印象づけるのも1つの方法です」「短い時間にもかかわらず、いずれのプロジェクトも中身の濃い発表でした。プロジェクト活動における4つの力は企業が求める人材とも重なるものがありますから、社会に出てからも大いに役立ててください」などの講評が寄せられました。

最後に梶井所長が、「いずれもレベルの高い発表内容でした。グッドプレゼンテーション賞ではプロジェクトの活動内容の評価ではなく、活動をわかりやすく紹介するとともに、反省点や今後の課題も発表できているかが評価の対象となりました。講評を参考にして、ぜひ来年度に生かしてください」と締めくくりました。

※「グッドプレゼンテーション」賞の受賞団体は以下のとおりです
病院ボランティアプロジェクト（湘南校舎）
サイエンスコミュニケーター（湘南校舎）
阿蘇は箱舟プロジェクト（阿蘇校舎）

リーダー研修

6/12 フォローアップ研修「熱中症、予防と対策」

講師：湘南健康推進室　笠 富美子

＜湘南校舎15号館4階第1会議室にて実施。テレビ会議システムで5校舎接続＞
プロジェクト活動中に熱中症にならないための予防法及び熱中症を引き起こしてしまった時の対処法・応急処置方法を学びました。

12/11 フォローアップ研修「ソーシャルメディアの活用について」

講師：総合情報センター　矢島 杏梨・伊波 若菜

＜湘南校舎15号館4階第1会議室にて実施。テレビ会議システム5校舎接続＞
学生間で流行しているSNSの危険性と個人情報保護方法について学びました。

1/15 フォローアップ研修「リーダー育成フォローアップ研修」

講師：チャレンジセンター　園田 由紀子

＜湘南校舎15号館4階第1会議室にて実施。テレビ会議システム5校舎接続＞
コミュニケーションを取る上で「リーダーとしてやらねばならない必要性があるが、いやだとかんじたりしてしまうこと」や「なぜそうするのかという意義づけ」などワークシートに記入し、リーダーとして必要なことを学びました。

2/20~22 「リーダー研修会」

＜湘南校舎15号館4階第1会議室にて実施＞
校舎を越えたプロジェクト学生同士の交流およびプロジェクトリーダーの育成を通じて、プロジェクト活動を活性化することを目的に実施されました。今年度は札幌・高輪・湘南・熊本・阿蘇の5校舎の学生43名が一堂に会し、2泊3日で行われました。
参加した学生からは「"考え方"や"見方"が大きく広がり、話し合いの大切さを知った」「意識の高い学生の集まりで自分自身がとても良い刺激になりました」といった感想がありました。

目　的
校舎を越えたプロジェクト学生同士の交流、およびプロジェクトリーダーの育成を通じて、プロジェクト活動を活性化する

ねらい
プロジェクトメンバーとしてメンバーを統率し、プロジェクト目標を達成するために必要な力を学ぶ
・リーダーシップとは何かを考える
・リーダーとしての自分の課題を捉える
・所属するプロジェクトの課題は何かを考える

■研修プログラム

1日目（堀本）
【アイスブレイク】自己紹介ワーク
・相手を理解する（コミュニケーション方法を考える）
・湘南校舎内施設見学
【講義】チームマネージメントとリーダーシップ
・リーダーとしての課題についてワークシート記入時間
ピア・レビュー：グループで課題の話し合い

2日目（藤田）
①オリエンテーション
②個人ワーク・グループワーク
・実習「あなたの学習スタイル」・実習「総当りインタビュー」
・実習「コンセンサスを求めて」・実習「私の価値観」
・実習「私のライフポジション」・実習「私を活かすコミュニケーション」

3日目（藤田）
・実習「バスは待ってくれない」・実習のふりかえり
・個人ワーク・グループワーク・実習「イメージ交換」
・実習「私の得たこと、学んだこと」
・修了式（修了証授与）

2013年度チャレンジプロジェクト活動報告

ライトパワープロジェクト

<ものつくりを通してヒューマニズムを学ぶ>

ものつくり 湘南

ソーラーカー、電気自動車、人力飛行機の製作を通して社会に貢献できる人材を育成することを目標に、世界大会に参加するなど、技術の向上を図りました。また、大学周辺地域の方々を対象としたイベント活動も積極的に実施しました。

プロジェクトリーダー	鹿島 隆寛	工学部 機械工学科 3年
サブリーダー	三宅 真亜子	工学部 航空宇宙学科 2年
	本田 鼓太郎	工学部 機械工学科 2年
広報リーダー	坂本 凌	工学部 航空宇宙学科 3年
会計責任者	大森 翼	工学部 精密工学科 2年

参加人数　130名

4月14日
ソーラーカーチームがアメリカ大使公邸にて交流

■ アメリカ大使館（東京）

ソーラーカーチームが他大学の学生団体とともにアメリカ大使公邸（東京都港区）に招かれ、ジョン・ケリー国務長官、ジョン・ルース駐日アメリカ大使らと学生たちとの対話イベントに出席。長官にソーラーカーチームの活動を説明しました。

2014年2月25日
ムハンマド皇太子殿下（UAE）が来学

■ 高輪校舎

UAE、アブダビ首長国のムハンマド皇太子殿下が高輪校舎で、ライトパワープロジェクトの2013年型ソーラーカー「Tokai Challenger」を視察しました。当日は、プロジェクトの学生が準備を担当し、チーム監督の木村英樹教授とUAEからの留学生が代表して、マシンの性能やこれまでの実績を紹介しました。また、同国の石油資源大学と東海大学とのソーラーカー共同開発に関する最終契約書への調印と、エティハド航空と東海大学ソーラーカーチームとのスポンサー契約に関する合意書の調印も行われました。

ワールドソーラーチャレンジ

10月6日～10月13日

惜しくも3連覇逃すものの堂々の2位で完全走破達成

10月6日 ▶ダーウィンを20位でスタートし一気に3位へ

チームは前日の予選で20位と不本意な結果に終わりましたが、ダーウィンを出発して最初のコントロールポイント（CP）となるキャサリンに至るまでに4位の好位置に上昇。この日の到達地点となった第2CPのダンマラまでの道程で3番手まで追い上げました。トップのオランダ・デルフト工科大学「Nuon Solar Team」とは27分差、2位に着けるオランダの「Solar Team Twente」とはわずか1分差となりました。

10月8日 ▶レース後半戦に突入、2番手からの逆転を目指す

レース3日目を迎え、ダーウィンから1,347km地点で2番手の位置から前を行くオランダ・デルフト工科大学「Nuon Solar Team」を追いかけました。途中、中間点となる第5コントロールポイント（CP）のアリススプリングス、第6CPのカルゲラ、さらにそこから約20km進み、ノーザンテリトリー（北部準州）から南オーストラリア州へと入りスタートから2,086km地点まで到達しました。

10月10日 ▶約3,000kmを走破し2位でアデレードに到達

残すところ192kmとなった東海大学ソーラーカーチーム。大会5日目の10日は、トップを走るオランダ・デルフト工科大学「Nuon Solar Team」との約25分差を逆転すべく、午前8時のスタートから積極的な走りを見せるも、あいにくの悪天候に見舞われ実質的なゴールとなるフィニッシュ計測点に2番手で到達しました。目標としていた大会3連覇には届かずメンバーたちは悔しさをにじませましたが、一方で世界最高峰のソーラーカーレースを事故なく完走した喜びにも包まれました。

4月20日
東海チャレンジャーがトミカとして商品化

「東海チャレンジャー」が、株式会社タカラトミーのミニカー「トミカ」シリーズの一つとして商品化され、販売が始まりました。太陽光だけで動く"未来のクルマ"を子どもたちにも知ってもらおうと、商品化されたものです。スケールは67分の1、価格は378円（税抜き価格360円）

7月6日
小学校で「ソーラーカー教室」を開催

■ 世田谷区立山野小学校（東京都世田谷区）

教室は約900名の全校児童を対象に2回行われ、木村英樹教授による講義とソーラーカーのデモ走行を行いました。今回の教室は、山野小学校の校長先生から、児童に本物のソーラーカーを見せたいという依頼に応えたもの。当日は天候にも恵まれ、走行後の質問では、児童から熱心な質問がありました。

7月10日
「エコカー教室」を開催

■ 湘南校舎

秦野市立大根小学校4年生の児童126名を対象としたエコカー教室を開催。本教室は「これまでの自動車がかかえる環境問題は何か」「エコカーにはどんな種類・仕組みがあるか」などの講義や、ソーラーカーや電気自動車の走行見学を通して、子どもたちに「ものつくり」に対する興味を持ってもらうことを目的として実施されました。

8月4日
「ものつくり教室」を開催

■ 湘南校舎

地域の子供たちに遊びを通し、身近にある科学の不思議を体感してもらい、その原理や仕組みを教えて、面白さを知ってもらうことを目的に、「ものつくり教室」を開催。今回は大根小学校・みずほ小学校全学年の児童47名を対象に、"ゴム動力飛行機"を作成しました作成後は高間原第2グラウンドで、実際に飛ばして距離を競いました。

11月23日
「えびな環境フェスティバル」に出展

■ 海老名市（神奈川県）

このイベントは若年層をターゲットとし、ICT（情報通信技術）を活用した節電や、省エネなどへの取り組み方を伝えようと開催されているもので、本プロジェクトはより多くの方にソーラーカーについて知ってもらうことを目的に参加しました。当日は約500名の方が来場。プロジェクトのブースでは実際に2011年型Tokai challengerを展示しました。

11月3日
建学祭で人力飛行機展示

■ 湘南校舎

建学祭開催中の湘南校舎6号館前広場を会場に、人力飛行機を展示。実際に飛行機の組み立てから見学してもらい、人力飛行機の魅力を紹介しました。また、人力飛行機の最大イベントである鳥人間コンテストに関心を持ってもらうためチラシなどを配布して紹介に努めました。

2014年3月2日
「科学技術教室」を開催

■ 湘南校舎

湘南校舎近隣の小学生を対象に、ものつくりの楽しさを知ってもらおうと、自衛隊神奈川地方協力本部をはじめ、東海フォーミュラクラブなど他のプロジェクトの協力を得て8号館などを会場に開催しました。ペーパークラフト製作やストロー飛行機の製作、フォーミュラカーの体験試乗など、盛り沢山な内容に、参加した子供たちも大喜びでした。

スポーツ社会貢献プロジェクト

社会貢献 湘南

<より多くの人に“スポーツのチカラ”を伝える効果的な活動の企画・実施>

これまでに創り上げてきた大学周辺地域との関係を活用し、東海大学の特色をいかしたスポーツイベントを開催。また、イベントの交流を通じて、さらなる地域のニーズを掘り起こし、新たな企画を立案・実施しました。

プロジェクトリーダー	中林 辰馬	体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科 3年
サブリーダー	滝澤 誠弥	政治経済学部 経営学科 3年
	大宮 陸	体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科 3年
広報リーダー	森 健太郎	体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科 2年
会計責任者	玄 知奈	体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科 3年

参加人数　65名

5月5日 「秦野子ども祭り」に参加

■ 秦野市中央運動公園陸上競技場（神奈川県秦野市）

これは、子どもたちとの交流を図るとともに、親子で楽しく参加できる触れ合いの場を作ることを目的としており、スポーツ社会貢献プロジェクトは親子を対象とした参加型の企画を実施。『キックボーリング』などを行い、小学生・未就学児童合わせて約140名、保護者約50名が参加しました。

4月28日 「親子で運動あそび」を実施

■ 平塚市西部福祉会館（神奈川県平塚市）

未就学児童とその保護者を対象に、簡単にできる運動あそびイベント「親子で運動あそび」を開催しました。プロジェクトとしては初めて未就学児童を対象としたもので、イベントでは、「ララらぞうきん」、「おもちゃのチャチャチャ」など、家庭内でもできる簡単な歌を使った遊びを紹介しました。

6月15日 松が丘小学校「子ども大会」に参加

■ 平塚市立松が丘小学校（神奈川県平塚市）

子ども大会の目的は「体を使い仲間と交流しながら遊び、運動を楽しいものと感じてもらう。」というもので、この日は176名の児童が参加。同プロジェクトは、アルプスじゃんけんをはじめ、前後左右ゲーム、手繋ぎゲーム、猛獣狩りゲーム、手繋ぎ鬼ごっこの5つのレクリエーションを行いました。参加した児童は「大学生と遊べて楽しかった」と元気いっぱいに運動を行っていました。保護者の方も「子供が普段関わることのない学生と遊ぶ機会ができてとても楽しそうだった。」との感想を述べていました。

11月16日 「Youth age a go-go! Festival ~We Love ISEHARA!~」に参加

■ いせはら市民活動サポートセンター（神奈川県伊勢原市）

「スポーツを通して、体を動かす楽しさを伝える」イベントで、“ニュースポーツで遊ぼう!”を開催しました。当日は14名の小学生が参加し、参加者が円になって手を繋ぎ、スタッフの指示で左右に動く「左右ゲーム」のほか、じゃんけんサッカー、ピンポン玉リレーなど、プロジェクトが独自に考えたスポーツを紹介しました。

2014年1月12日 「第6回東海スポーツDAY」を開催

■ 湘南校舎総合体育館

「スポーツでつながる家族の日」をテーマに、スポーツを通して子どもたちや地域の方々にスポーツの楽しさや素晴らしさを知ってもらうとともに、東海大学をより身近に感じていただくことを目的に開催したもの。当日は湘南校舎近隣の小学生の36家族、111名が参加しました。1家族に1名の学生が指導役となり、学生たちがこの日のために創作した「じぇじぇじぇ!?だんす」をはじめ、新聞紙を破りながら踊る「新聞ダンス」や「童謡ダンス」など、趣向を凝らしたダンスのほか「スポーツ鬼ごっこ」などを一緒に楽しみました。

サイエンスコミュニケーター

社会貢献 湘南

<理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる>

子どもから大人まで多くの人が科学に興味を持ってもらえるよう自己の専門性を高め、その成果として、「サイエンスフェスティバル」、「科学喫茶」をはじめとする科学イベントを実施しました。

プロジェクトリーダー	高瀬 早桐	工学部 材料科学科 2年
サブリーダー	海老沼 真結	理学部 物理学科 2年
広報リーダー	平田 将大	教養学部 人間環境学科 3年
会計責任者	金子 聖弥	教養学部 人間環境学科 2年

参加人数　50名

7月6日 第5回科学喫茶「知って得する保存の科学~これであなたも保存の達人!?~」を開催

■ 東京海洋大学品川キャンパス（東京都品川区）

科学喫茶とは、科学の各分野の専門家を講師に招いて講師と参加者が語り合う企画で、今回で5回目です。「食品の保存」をテーマにメイン会場(東京海洋大学)とサブ会場(湘南校舎)をインターネット中継でつないで開催しました。東京海洋大学の鈴木徹教授を講師に招き「野菜の保存はどうしたら良いの?」、「冷蔵や冷凍しても良いものは何?」などについて「科学の視点」から考える講義を行いました。

8月6日 「中高生のための理科体験授業と交流会」に参加

■ 湘南校舎

この催しは、学園付属生を対象に理工系の楽しさに触れ、進学意欲を高めてもらうことを目的としたもので、東海大学理工系の先生方による体験授業が開催されました。本プロジェクトは体験授業として「光と色の実験」「ケミカルライト」「バンジーチャイム」の三つの実験を行いました。「当たり前だった現象や反応が科学と密接に絡み合っていることを知ることができた」などの感想が寄せられました。

8月10日~12日 「第24回星の学校」に参加

■ 海老名市文化会館（神奈川県海老名市）

星の学校は、子供たちに宇宙や天文の神秘・面白さを伝えるため、海老名天文同好会が主催して夏休みに開催されるもので、隕石や彗星の歴史を学んだり天体観測などを行ったりしています。本プロジェクトは8月11日に「星のつどい」という授業を開講し、隕石・彗星の歴史・構成・豆知識などをクイズ形式で出題することで、子供たちの天体への興味と理解につなげることができました。

11月17日 「サイエンスフェスティバル2013 in 亘理町」に参加

■ 亘理町中央公民館（宮城県亘理郡亘理町）

このイベントは「被災地への科学・教育をベースにした支援」に取り組んでいるNPO法人ガリレオ工房と亘理町子ども会育成連合会が主催して行われました。東日本大震災後、子ども会の活動が縮小し遊び場が制限されている中、親子のふれあいを深めてもらおうと開催された科学イベントです。当日は200名の地域住民の方が参加され、その中で本プロジェクトは、アルギン酸ナトリウム（昆布のぬめり成分）を塩化カルシウムの溶液に滴下して作成するカラフルな人工いくらの実験ブースを設けました。

11月23日 環境教室「劇で! 実験で! 水の流れを知ろう!!」を開催

■ 平塚市立みずほ小学校（神奈川県平塚市）

「環境キャラバン隊」と一緒に「みずほ祭」（主催：開催校PTA）において、環境教室「劇で! 実験で! 水の流れを知ろう!!」を開催しました。2回実施した教室には生徒や保護者ら計77名が来場しました。この催しは、環境キャラバン隊とともに「水の大切さを知ってもらいたい」と企画しました。当日は、ペットボトルと砂石で作ったろ過装置に赤色の液体を注いで透明にする実験を披露し、自然の水の浄化システムを解説することで、水の大切さを訴えました。

東海大学学生ロケットプロジェクト（TSRP）

ものつくり
湘　南

<ロケットの製作、打ち上げ、計画の立案、交渉、実行を通じてものつくり及びプロジェクトマネジメントについて学ぶ>

ハイブリッドロケットの高高度（2km）到達に向けて、すべて学生の手による要素技術の開発とマネジメントに取り組みました。また、打ち上げ実験だけでなく、イベントなどにも積極的に参加しています。

プロジェクトリーダー	川井 寛量	工学研究科 航空宇宙学専攻 2年
サブリーダー	小黒 純平	工学研究科 航空宇宙学専攻 1年
	長谷川 優一	工学部 航空宇宙学科 4年
広報リーダー	植松 千春	工学部 航空宇宙学科 2年
会計責任者	水野 裕介	工学部 航空宇宙学科 3年

参加人数　59名

3月26日
「ハイブリッドロケット教室」を開催

■ 湘南校舎

この教室は、高校生を対象にロケットへの関心を高めてもらおうというもので、今回はプロジェクトマネージメント・解析に重点を置いて講義しました。これらのテーマは、普段高校生があまり触れることのないものですが、円滑にものつくりを進めるには不可欠のもので、参加者も熱心に聞き入っていました。

6月2日~9日
「29th International Symposium on Space Technology and Science.」で展示

■ 名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）

ISTSは宇宙工学・科学に関する最も有名な国際学会で、「宇宙工学」「宇宙科学」「宇宙医学」「宇宙法」の専門家にプレゼンテーションを通じて情報交換を促し、宇宙関連活動を推進するシンポジウム。本プロジェクトは3月に北海道大樹町にて打ち上げたH-29号機の展示をしました。

6月25日
「宇宙教室」で講演

■ 神奈川県立秦野曽屋高校（神奈川県秦野市）

本教室はUNISEC（大学宇宙工学コンソーシアム）の学生グループが、高校生を主な対象とし、宇宙工学を中心としたとした大学での勉強や研究について紹介し、進路検討の材料にしてもらうことを目的に開催するもの。当日はロケットづくりの実際について講演、40名の生徒が参加しました。

8月18日~26日
「第9回能代宇宙イベント」に出場

■ 能代宇宙広場（秋田県能代市）

このイベントは学生・社会人による日本最大規模のロケット打ち上げ及び自律ロボット制御のアマチュア大会で、毎年8月中旬に行われ、県内外合わせ20以上の大学や団体が参加。本プロジェクトは、H-31号機を海打実験、H-32号機を陸打実験で打ち上げました。

10月1日~4日
「東京国際航空宇宙産業展2013」に出展

■ 東京ビッグサイト（東京都）

展示内容は、2012年3月北海道大樹町で打ち上げ実験を行ったハイブリットロケット「H-27号機」の飛翔写真を中心に、燃焼実験や発射台への設置の写真をパネルで紹介。またロケットエンジンを展示するなど、ブースには90名近くの方が訪れました。

2014年3月10日~18日
ハイブリッドロケット打ち上げ実験

■ 北海道広尾郡大樹町

2015年夏に打ち上げ予定ロケットの機体の技術試験を目的に打ち上げ実験を行います。特に分離回路の技術実証、大型エンジン開発に向けたL型モーターの技術立証などを主な目的としており、打ち上げには自作の全長5メートル発射台を用い、地上から843メートルの到達高度を目指して打ち上げを予定しています。

3.11生活復興支援プロジェクト

社会貢献
湘　南

<外部交渉するために「考え」を伝える方法を学ぶ>

2011年3月11日に起こった東日本大震災で被災した地域に対して、「被災地の環境をもとに戻す」という従来の災害復旧支援ではなく、新たな発想で生活環境を考えた「持続可能な復興支援」を目標に活動を進めています。

プロジェクトリーダー	阿部 将司	工学部 精密工学科 2年
サブリーダー	笠間 友樹	工学部 建築学科 4年
	山根 千明	教養学部 人間環境学科 3年
広報リーダー	北島 圭	工学部 建築学科 4年
会計責任者	本間 聖崇	工学部 建築学科 4年

参加人数　52名

5月17日~26日
大船渡市、石巻市で現地調査

■ 岩手県大船渡市、宮城県石巻市

今回は、被災地の現段階の状況を知り、新しい考え方や外から見た現地の魅力を見つけ、今後企画を検討している泊地区（岩手県大船渡市）でのイベントに反映させること、関東での活動を検討している、防災・フリーペーパー・復興ステーションのための打ち合わせ・情報収集を目的として調査しました。

6月8日
「東北ココロむすぶプロジェクトin 鎌倉」に出展

■ 鎌倉生涯学習センター（神奈川県鎌倉市）

本プロジェクトは、関東でできる東北への支援活動にも目を向け、現地から直接商品を仕入れ、東北物産店を出店。また、現在の東北の様子を伝え、東日本大震災の風化防止に努めていきたいと、5月の現地調査の結果を、プロジェクトの活動と併せ展示ブースで紹介しました。

6月22日~23日
「応急空間を考えるワークショップ」を実施

■ 立川かしのき幼稚園（東京都立川市）

ワークショップを通じて、プロジェクト内の「どんぐりハウスチーム」と「コミュニティケアチーム」の連携を強め、チームワークや問題解決能力を磨くのが目的。また災害を想定して避難所内の居住空間づくりに挑戦することで被災者の気持ちをより深く理解し、今後の復興支援活動につなげていきます。

8月17日~18日
「森と木に包まれる夏まつり!」に復興ステーションを設置

■ 小田原市いこいの森（神奈川県小田原市）

復興ステーションは、間伐材を用いて作成した空間で、被災地やプロジェクト活動に関するパネル展示、組手什の体験ワークショップ、東北物産展などを開催しました、2日間で62名の方が観覧、物産店の売り上げ金は、取引先の三陸ふるさと振興株式会社道の駅さんりく、大船渡市民の方に郵送されました。

8月22日
大船渡市でイベントを共催

■ 岩手県大船渡市

三陸町越喜来泊地区に「思い出の『ば』」を制作し、地元の人々との交流を深めました。芝浦工業大学の学生らと共催の「とまりに花を咲かせましょう―未来へ繋げる夏の泊の縁づくり―」の一環で実施したもの。記憶を可視化するための白い幕と、記憶の継承を意味する杭を使い、新たな交流の場を作り、桜の植樹も行いました。

11月24日
「大門市で東北物産展」を開催

■ 平塚市八幡大門通り（神奈川県平塚市）

この朝市は神奈川県内の逸品や特産品を広くPRしようと毎年開かれているもの。本プロジェクトでは、継続的な復興支援活動の一環として、岩手県大船渡市の方から仕入れた塩蔵わかめとなどを販売。本プロジェクトが作成した大船渡市の魅力を伝えるフリーペーパーを配布。活動紹介のパネルも展示しました。

病院ボランティアプロジェクト

社会貢献 湘南

<伝える力・聴く力・書く力を学ぶ>

医学部付属病院を拠点に、入院生活を快適に過ごしてもらうことを目的とした病棟ボランティア、音楽団体とコラボレートした癒しのイベント（院内コンサート）を実施したほか、地域住民を対象に医療知識を深めるセミナーの開催、小児患者が楽しみながら治療の大切さを理解する絵本を制作しました。

プロジェクトリーダー　吉永 将太郎　教養学部 人間環境学科 2年
サブリーダー　野上 裕太郎　教養学部 人間環境学科 2年
　猪野 由佳理　教養学部 人間環境学科 2年
広報リーダー　久保 佳那　教養学部 人間環境学科 2年
会計責任者　桑原 奏子　教養学部 人間環境学科 2年
参加人数　55名

8月9日　12月11日
「癒しのイベント」を開催

■ 東海大学医学部付属病院（神奈川県伊勢原市）

入院中の患者さまとそのご家族を対象に、夏・冬に「季節」を体感していただけるよう、季節にちなんだテーマで開催。8月は「めんそーれ!沖縄　～沖縄音楽で楽（たの）シーサー～」を開催し、約140名の方々が来場。また12月は、「サンタからのクリスマスプレゼント～」と題して、サンタクロースの家に患者さまを招くという趣向で、音楽会を開催しました。コンサートは、教養学部芸術学科で音楽療法を学ぶ学生や、伊勢原市で定期的に音楽会を実施している伊勢原混声合唱団が、クリスマスメドレーなどを演奏しました。

11月30日
イベント「病棟ボランティアの可能性」を開催

■ 伊勢原校舎

これは、真に患者さんに必要とされるボランティアとは何かを考えるために実施したものです。当日は、学生やボランティア経験のある地域住民など約40名が参加。東海大学健康科学部の妻鹿ふみ子教授が講演し、「ボランティアとは他人に共感することをベースとして、社会の課題を解決するために自発的、継続的に行う無償の行為である」と、具体例を挙げて解説。その後グループに分かれてワークショップを実施しました。また、当日は、本プロジェクトが作成した病院ボランティアを知るための広報誌『BRIDGE』創刊号を配布しました。

11月30日
広報誌「BRIDGE」を創刊

病院ボランティアの活動をもっと広く知ってもらおうと創刊しました（B5判・カラー20頁）。社会と病院をつなぐ役割をめざしており、医学部付属病院や秦野市、平塚市などの公民館などに配布されています。創刊号ではボランティア団体の活動を特集しています。

2014年1月27日
「学生ボランティア団体支援」に採択

■ 青山オーバルビル（東京都渋谷区）

自由な発想と行動力によって社会貢献を計画・実行している学生団体が対象の助成制度で、入院中の子どものための絵本を制作して東海大学医学部付属病院などに贈呈した企画をさらに広げようとの趣旨で応募したところ、これが評価され採択されました。

2014年3月13日
絵本「できるもん」「みんないっしょだよ」を制作

小児患者を対象とした入院のためのプレパレーション用絵本の第二弾を制作。この絵本は、東海大学医学部付属病院小児病棟の看護師をはじめ、東海大学教員、学外の専門家などに、小児患者が入院生活で困っていること、守ってほしいことをヒアリングし、今回はマスク着用やMRI検査の大切さなどをテーマにしました。

2014年3月23日
「うつ病の境界」を開催

■ 伊勢原市中央公民館

講師に伊勢原市で伊勢原まごころクリニックを開業する精神科医の小錦一平氏を迎え、社会で問題となっている新型うつ病について講義していただきます。本セミナーは、市民の医療知識を高めることを目的に毎年開かれています。

Music Art Project（MAP）

社会貢献 湘南

<音楽を通して自分たちの活動の場を増やし、人と人の出会い、繋がりを広げる>

東海大学松前記念館講堂、平塚市民センターホールなどで演奏会を実施するとともに、メンバー個人の音楽感性の向上に努めました。また、2013年度は、湘南校舎や東北でのチャリティーコンサートを実施しました。

プロジェクトリーダー　石川 健斗　教養学部 芸術学科 3年
サブリーダー　吉田 安那　教養学部 芸術学科 2年
　近藤 有里　教養学部 芸術学科 4年
広報リーダー　勝間田 智美　教養学部 芸術学科 2年
会計責任者　三枝 幸祈　教養学部 芸術学科 2年
参加人数　141名

5月23日
チャリティーコンサート「～今、私たちにできること～」を開催

■ 湘南校舎

3.11生活復興支援プロジェクトと共同企画として入場無料で開催、会場ロビーで復興支援の募金を行いました。会場には138人の方が来場。有名曲を中心に誰もが楽しめるプログラムで、最後は全員で「ふるさと」「花は咲く」を合唱しました。来場者には東北に向けてのメッセージを書いていただき、この寄せ書きは3.11プロジェクトとゆかりある名取市の図書室に送られ、また募金で、集まった39,160円は日本赤十字社に寄付され、東日本大震災の復興に役立てられます。

6月14日
第4回学生創作オペラ「NADESHIKO」上映会を開催

■ 湘南校舎松前記念館講堂

上映した映像は、2月26日にグリーンホール相模大野で行われた学生創作オペラ「NADESHIKO」を収録したもので、音響設備の整った会場で迫力ある映像を上映することができました。また、「オペラができるまで」のフリーペーパーを配布したほか、本番の写真やテロップ、フィナーレで歌った曲のピアノ演奏などを録音・編集したムービーも上映しました。さらに、キャストによる裏話・エピソードなどがインタビュー形式で語られました。

12月8日
「湘南ひらつか第九のつどい」に参加

■ 平塚市民センター大ホール（神奈川県平塚市）

このイベントは市民参加型事業の一環として、歓喜の歌である「第九」を学び発表することで、音楽文化の向上と、明るく豊かで潤いのある市民生活に寄与することを目的に開催されたものです。その中で本プロジェクトは、平塚市民の方々と共にベートーヴェン作曲「交響曲第9番作品125　第4楽章」の「歓喜の歌」を合唱しました。今後は、こうした機会を活かしてより市民の方との交流を深めていくことを課題として取り組んでいくこととしました。

2014年2月23日
「東北チャリティーコンサート」を実施

■ 仙台サンプラザホール（宮城県仙台市）

今、私たちにできることとは何か。人それぞれ様々な考えがある中で、「震災を忘れないこと」は誰でも取り組むことができる復興支援の一つです。私たち一人ひとりが大きな支援をすることは難しくても、「震災を忘れないこと」「風化させないこと」、そして何より「諦めない」強い気持ちを持つことは、私たちにもできる復興支援です。そこで、音楽を通して宮城県を盛り上げることが、「今、私たちにできること」という考えのもと、『NEVER GIVE UP ～今、私たちにできること～』をテーマに、仙台市で復興支援のチャリティーコンサートを開催しました。
今回は宮城県の小・中学校と連携し、普段は違う場所で「音楽」を楽しんでいる仲間が一つの場所に集い演奏を披露することで、私たちにできることを表現しました。第一部のMAPの単独ステージでは「故郷」をテーマに、脚本、編曲を自分達で手掛けた創作音楽劇を行いました。第二部は、参加校による吹奏楽や合唱、第三部では、参加者全員で最後に「花は咲く」の合奏と合唱をしました。一人ひとりの力は微力でも、その小さな力が集まることで大きな音楽の力となることを感じていただけたコンサートになりました。仙台の小・中学生と音楽を通して一つのステージを作り上げるという貴重な体験ができ、大きな達成感を得ることができました。

環境キャラバン隊

環境・農業 湘南

<メンバー全員のプレゼン能力の向上>

主に小学生を対象とし、身近にできるエコを伝える環境教室を開催。そのため「ABC活動（あたりまえのことを、ばかにしないで、ちゃんとやる）」をメンバー内でも徹底して活動に取り組みました。

プロジェクトリーダー	瀧戸 一希	政治経済学部 政治学科 3年
サブリーダー	西野 詢一郎	教養学部 人間環境学科 3年
	石塚 杏奈	教養学部 人間環境学科 2年
広報リーダー	内藤 由佳	教養学部 人間環境学科 2年
会計責任者	小野寺 象	教養学部 人間環境学科 2年

参加人数　59名

8月24日 「あやせ環境展」に参加

■ 神奈川県綾瀬市

あやせ環境展は、地域の団体や企業が取り組んでいる環境活動などの展示を行うもので、本プロジェクトは綾瀬市からの要請で毎年参加、様々な年齢層の方に“身近なエコ”を学び、実践してもらうことを目的とし、環境劇の披露や天ぷら油で走るバス“天ちゃん号”を展示しました。

9月2日~8日 「夏季キャラバン」を実施

■ 北海道夕張郡栗山町

北海道夕張郡栗山町の栗山小学校など3校で夏季キャラバンを行いました。今回は、昨年度の同地での活動が対象児童にどのように影響し、私生活に活かされているかを確認することが目的。体験授業では、本プロジェクトの天ぷら油とBDF（バイオディーゼル燃料）で走るバス「天ちゃん号」の説明と乗車体験を行いました。

11月23日 「劇で!実験で!水の流れを知ろう!!」を開催

■ 平塚市みずほ小学校（神奈川県平塚市）

サイエンスコミュニケーターが協力し、「水の大切さを知ってもらいたい」と共同で企画したもの。環境教室「劇で! 実験で! 水の流れを知ろう!!」を初めて開催し、教室には生徒や保護者ら計77名が来場。当日は、環境キャラバン隊のエコレンジャーが、身振り手振りを交えて水が地球をどう巡るかを紹介しました。

キャンパスストリートプロジェクト（C.A.P.）

地域活性 湘南

<積極的に自ら行動する力を身につける>

地域交流イベントを行うイベントチーム、フリーペーパー発行のThLive!チームで構成されており、各々が身につけた組織力・運営力を共有し、より質の高い地域活性化活動を行うことを目標として取り組みました。

プロジェクトリーダー	三井 孝大	教養学部 人間環境学科 2年
サブリーダー	小坂 信家	工学部 機械工学科 3年
	佐伯 奈央	工学部 応用化学科 2年
広報リーダー	山田 成悟	文学部 広報メディア学科 2年
会計責任者	吉越 彩香	工学部 機械工学科 3年

参加人数　50名

5月25日 「わくわくさんぽ2013」を開催

■ 秦野市鶴巻

これは、大学近隣の園児および保護者合計15名を対象に開催したもので、子どもたちがインドア傾向になっている昨今、「もっと外に出て自分の住んでいる街のことを知ってもらおう」というコンセプトの元、鶴巻地区の自然に触れると同時に道路などでの交通ルールを学んでもらうことを目指しました。

6月29日 「美化さんぽ~きれいは作れる~」を実施

■ 東海大学駅前・大根川付近

この活動は、日ごろお世話になっている地域の方に感謝の意を込め、大学周辺地域をきれいにするのはもちろんのこと、メンバーと地域住民の交流を目的とし、併せてプロジェクト活動を広く知っていただくためのもの。当日は、30名が参加。「大根川付近清掃ルート」など3班で歩きながらゴミ拾いなどを行いました。

11月20日　12月1日~25日 「クリスマスU-night」を開催

■ 大根幼稚園（神奈川県秦野市）・東海大学駅前広場

地域交流の一環として、近隣の幼稚園児とペットボトルでイルミネーションを作成し、駅前広場で展示を行うこととなり、メンバー3名が大根幼稚園を訪問。園児らに紙を配布し、そこに絵や文字などを書いてもらい、用意したペットボトルに紙をはめ込みイルミネーションの作成を行いました。

Tokai Formula Club

ものつくり 湘南

<将来に活かせる知識、技術力を身につける>

第11回全日本学生フォーミュラー大会優勝を目指し、アクセラレーションやデザイン審査など8項目の審査に向け、マシン製作だけではなくプレゼンテーションなどにも力を入れた活動を行いました。

プロジェクトリーダー	前見 旭人	工学部 動力機械工学科 3年
サブリーダー	佐藤 勇太郎	工学部 機械工学科 3年
	多根 大樹	工学部 動力機械工学科 3年
広報リーダー	佐藤 勇太郎	工学部 機械工学科 3年
会計責任者	多根 大樹	工学部 動力機械工学科 3年

参加人数　52名

5月11日~12日 「第13回ソープボックスダービー日本グランプリ」に参加

■ 秦野市中央運動公園（神奈川県秦野市）

ソープボックスダービーとはエンジン等の動力を持たず、重力のみを動力源として走行する車両で、一定区間の走破タイムを競うレースです。7~13歳の子供とその家族が参加する日本大会は、優勝するとアメリカで開催される国際大会へ参加出場資格が与えられる日本代表選考会でもあります。今回は、プロジェクトメンバー32名が参加し、大会に参加する車両が安全に走るよう整備と、車検の手伝い、大会当日はスタートの準備・コース警備・ゴールした車両の誘導の3つ役割に分かれて活動を行いました。

6月1日~2日 「第49回SHCCミーティングat大磯ロングビーチ」に参加

■ 大磯ロングビーチ（神奈川県大磯町）

この大会（湘南ヒストリックカークラブ　SHCC主催）は、クラッシックカー好きの人々が交流するイベントで、ジムカーナ形式で行われました。約200名が参加し、歴史的にも価値のあるヒストリックカーが、午前・午後1回ずつ走行し、タイムを競い合いました。また、貴重な車両の展示や車所有者の交流会も行われました。本プロジェクトは、学生フォーミュラの広報を目的にデモ走行と展示を行うため参加。マシントラブルでデモ走行はできませんでしたが、今年の大会に出場するマシン「TF2013」を展示し注目を集めました。

6月29日 「エコパ走行技術トレーニング」に参加

■ 静岡県小笠山総合運動公園ECOPA（静岡県袋井市）

このイベントは全日本学生フォーミュラ大会の参加者を対象とし、昨年度の全日本学生フォーミュラ大会に準じた動的競技コースで、学生フォーミュラ車輌を用い、走行データの取得やマシンドライバーの走行技術トレーニングを目的として開催されるもの。今年は16大学、約450名が参加しました。本プロジェクトは2013年度参戦車両での初の合同走行会となり、限られた時間の中、無事に4名のドライバーが周回コースを走行。また、他大学のマシンや走行を見学し、交流を深めました。

9月3日~7日 「第11回全日本学生フォーミュラ大会」に出場

■ 静岡県小笠山運動公園ECOPA（静岡県袋井市）

この大会は学生が構想・設計・製作した車両でものつくりの総合力を競い、自動車技術と産業の発展・振興に資する人材を育成することを目的に開催されています。競技はデザイン、コスト、プレゼンテーションなど静的審査とアクセラレーション、スキッドパッド、オートクロス、エンデュランス、燃費の動的審査の計8項目で得点を競います。本プロジェクトの車両「TF2013」はカーボンモノコックボディという新機構を採用、従来よりも軽量かつ剛性が高く、加速性能を競うアクセラレーション審査で1位。しかし、総合成績は11位に終わりました。

Beijo Me Liga

国際交流 湘南

<国籍関係なく個々の間での相互理解>

外国籍の子どもたちに対して、日本人と触れ合うことでしかできない体験や日本語修得に意欲的になってもらえるような交流・支援、「日伯交流キャンプ」や「日本のブラジル人学校訪問」を行いました。

プロジェクトリーダー	吉澤 海	教養学部 国際学科 3年
サブリーダー	金子 和樹	教養学部 国際学科 3年
	上田 祐華	教養学部 国際学科 3年
広報リーダー	武田 佳梨	教養学部 国際学科 2年
会計責任者	高橋 一博	文学部 北欧学科 1年

参加人数　61名

5月3日~5日 「金伯キャンプ」を開催

■ 湘南校舎

今回のキャンプは、日本とブラジル2国間の文化や言語・価値観の違いによって、日本社会にあまり溶け込めず、不安や困難を感じている在日ブラジル人が、この交流を通して不安や困難が少しでも和らぎ、未来を明るく感じてもらいたいと考え実施されました。参加したのは、日本にあるブラジル学校のHIRO学園（岐阜県大垣市）、Escola Opcao（茨城県常総市）、ラテン日系留学生団Nippon Foundation Scholar Associationで、伝統的なブラジルの音楽とダンス、ゲームなどを一緒に取り組み交流を深めました。

7月13日 「Festa Junina」を開催

■ 神奈川県厚木市

県内唯一の日系ブラジル人学校「エスコラ・アクアレラ・ブラジル（以下アクアレラ）」の関係者30名を対象に、アクアレラでの学習支援活動の一環として開催。Festa Juninaとはブラジルの一般的なお祭り（収穫祭）で、参加者は、男性はつけひげに帽子、ジーンズ、チェックのシャツ。女性はロングスカート、そばかす、チェックのシャツという格好をし、田舎の結婚式を表現したダンスを行います。会場には紙の魚釣りやボールあて屋台などを設置、ブラジルの伝統的な料理の屋台も披露され祭の雰囲気を盛り上げました。

Tokai International Communication Club（TICC）

国際交流 湘南

<自らの力で多文化共生社会を構築していく術を学ぶ>

留学生との交流や外国人児童生徒の学習支援に必要な異文化コミュニケーションスキルを身につけ、日本語・日本文化教授のための基礎知識・スキル、在日外国人についての諸問題を学びました。

プロジェクトリーダー	福岡 夏海	教養学部 国際学科 2年
サブリーダー	石田 梨紗	教養学部 国際学科 2年
広報リーダー	諏佐 海人	文学部 心理・社会学科 2年
会計責任者	平井 彩恵	理学部 物理学科 2年

参加人数　117名

6月22日 「スポーツ交流会」を開催

■ 湘南校舎

留学生と日本人学生との交流の機会をもっとつくろうと、スポーツ・レクリエーションを通し、日本人学生には国際交流の楽しさを、留学生には日本独自のスポーツや文化を知ってもらう場としてスポーツ交流会を開催しました。交流会には、留学生16名を含む約50名が参加しました。

12月27日 「“ASEANユースシンポジウム ~若者が語る多文化共生~”」を開催

■ 湘南校舎

多文化共生社会についての知識を深め、自分の考えや価値観を確立する事を目的に、さまざまな宗教、言語、文化を持つマレーシアから、日本との違いや多文化共生社会構築のすべを学ぶ、というテーマで開催。在日ASEAN青年ネットワークの留学生3名が日本と母国の違いなどを語るパネルディスカッションを実施しました。

4月6日~2014年1月10日 「Tomodachi Study Support」を実施

■ 湘南校舎

この企画は留学生の日本語能力向上を目的とするとともに、さまざまなことを気軽に相談できる日本人の友人をつくってもらうこと、また、日本語教育法副専攻を履修している学生などに実践の場を提供するため実施したものです。1月の活動終了日には、さまざまなゲームを用意したパーティーを開催しました。

Takanawa共育プロジェクト

地域活性 高輪

<地域交流でのコミュニケーションの確立と地域活性化>

高輪メリーロード商店街の清掃活動や高輪神輿同好会と連携した神輿担ぎ、クリスマスイベントの実施など、地域社会との交流で開かれた校舎を目指しました。

プロジェクトリーダー	米盛 聖也	情報通信学部 通信ネットワーク工学科 3年
サブリーダー	鈴木 琢也	情報通信学部 通信ネットワーク工学科 2年
	関 剛輝	情報通信学部 通組込みソフトウェア工学科 3年
広報リーダー	池本 昌史	情報通信学部 通信ネットワーク工学科 2年
会計責任者	斎藤 晃一	情報通信学部 経営システム工学科 3年

参加人数　55名

5月4日~5日 「高輪のれんノ市」に参加

■ 高輪メリーロード商店街（東京都港区高輪）

高輪地区の振興と交流を目的とした「高輪のれんノ市」に参加し、主催の高輪メリーロード商店街の方々と協力し、お祭りの設営、運営補助、地域の方との交流、さらに、本部の一区画を借り気仙沼へ送るお神輿の修繕費用の募金を行いました。またミニFMラジオに出演し、ボランティア活動の紹介などを行いました。

5月18日~19日 「浅草神社例大祭（三社祭）」に参加

■ 東京都台東区浅草

今回は、日頃交流のある高輪地区の神輿同好会「高輪神輿同好会」からの招待で、特別に浅草氏子の44町会の内の一つの町会神輿を担ぎました。19日の夕方は、町会の方全員で浅草神社から宮出しされた「三ノ宮」と呼ばれる本神輿を担ぐなど、大変貴重な体験をすることができました。

8月27日 復興支援募金の成果を気仙沼へ

■ 気仙沼ホテル観洋（宮城県気仙沼市）

津波によってみこしを失った宮城県気仙沼市の復興支援を目的とした「気仙沼に贈る高輪神輿募金プロジェクト」の活動によって集まった14万2989円を、気仙沼市を訪問し、みこしの修理・管理を担当する「弁天連」の会頭・藤倉清喜さんに手渡しました。また、南三陸町や気仙沼市内の復興状況なども視察しました。

9月7日~8日 「高輪神社祭礼」に参加

■ 東京都港区高輪

地域の行事を盛り上げようとこの祭礼には「高輪神輿同好会」の協力を得て、毎年参加しているもので、今年は9名の学生が参加。同好会員や近隣地域の神輿同好会とともにみこしを担ぎました。みこしに神霊を込める儀式「御霊入れ」に参加したほか、みこしを担いで高輪地区を練り歩く「渡御」を行いました。

9月8日 地域住民対象に「テニススクール」を開催

■ 高輪校舎

テニスを通じて地域との交流を深めようと硬式テニス部が主体となって企画、当日は大人から子どもまで、あわせて10名が参加。メンバーはコートの整備や受け付けの業務のほか、参加者にフォアハンドやバックハンドなどの基礎を指導。最後はまとめとして、全員が2人1組となってダブルスの試合をしました。

12月20日 「キャンドルペイント教室&クリスマス演奏会」を開催

■ 高輪校舎

学生食堂「コメドール」でクリスマスイベントを開催し、約20名の地元住民らが来場。キャンドルアーティストのDEJAVU氏を招いた「キャンドル教室」は、ゼリー状で形を自由に変えられる透明なロウでオリジナルのキャンドルを制作、また、Takanawa Jazz Ensembleがキャンドルの灯の中でクリスマスソングなどを演奏しました。

先端技術コミュニティ ACOT

ものつくり 熊本

<一過性の技術から継承される技術>

プログラミング能力育成、地域・技術連携、高大連携、ロボコン、農工連携、セキュリティセミナーの6項目を実践。「Green ET Challenge 2013」で優勝・準優勝を達成しました。

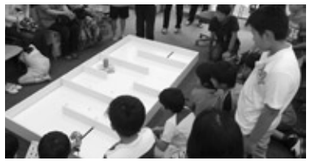
プロジェクトリーダー	国枝 桂亮	産業工学部 電子知能システム工学科 3年
サブリーダー	甲斐 未憲	産業工学部 電子知能システム工学科 3年
	森本 智	産業工学部 電子知能システム工学科 2年
広報リーダー	島津 貴大	産業工学部 電子知能システム工学科 2年
会計責任者	小川 幹矢	産業工学部 電子知能システム工学科 2年

参加人数　33名

6月15日、22日
「2013ロボットサマースクール」をサポート

■ 東海大学付属熊本星翔高等学校（熊本県熊本市）

NPO法人HITOプロジェクト主催で、地域の小学校4年生から中学校3年生までを対象に、レゴブロックによる自律走行ロボットの製作などを通じ、ものつくりの面白さを知ってもらうのが目的。メンバーはロボットの仕組みや組み立てを指導、アドバイスしました。



9月14日
「ETロボコン九州地区大会」に2チームが出場

■ 九州産業大学（福岡県福岡市）

組込みシステムの開発と教育分野における若年層・初級エンジニアに分析・設計モデリングの教育機会を提供することを目的に開催。市販ロボットを規定に従って組み立て、さまざまな技術を競うもので、中級者向けのアーキテクト部門へ参加し、1チームは完走賞を受賞しました。

2014年1月26日
「Green ET Challenge」で優勝と準優勝

■ 福岡SRPセンタービル（福岡県福岡市）

ロボットの省エネルギーなソフトウェアを新しく開発しようと毎年行われている「Green ET Challenge 2013」で1、2年次生3名による「東海ど～かい!?」が優勝し、1年次生2名による「ACOT」が準優勝しました。今回は、ロボットの消費エネルギーを減らすことが課題で、九州の企業・大学などから13チームが出場しました。

メカトロマイスター

ものつくり 熊本

<立ち上げたプロジェクトチームをどのようにまとめ、組織論と技術を学ぶための土台をどのように作り、そのための運営をどのように行っていくかを学ぶ>

鈴鹿サーキットで行われる国内最高峰のソーラーカーレースへの参加や、イベント「EVフェスティバル」でのソーラーカー展示など、ものつくりやプロジェクト運営の実践的な活動しています。

プロジェクトリーダー	川上 裕之	産業工学部 機械システム工学科 4年
サブリーダー	工藤 絢介	産業工学部 機械システム工学科 4年
	仲田 祐己	産業工学部 機械システム工学科 3年
広報リーダー	山田 健太郎	産業工学部 機械システム工学科 3年
会計責任者	山部 匠	産業工学部 機械システム工学科 4年

参加人数　30名

8月2日、3日
「ソーラーカーレース」鈴鹿に出場し完走

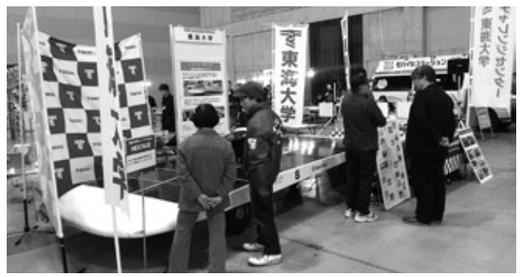
■ 鈴鹿サーキット（三重県鈴鹿市）

国内最高峰のソーラーカーレースである本大会への出場は、熊本校舎のチームとして12年ぶり5回目となった。今年立ち上げた「東海大学熊本ソーラーカープロジェクト」は、5時間耐久レースの上級者のドリームクラスに出場。学生6名、教職員4名のチームが現地入りし、結果は、エントリー9チーム中9位でしたが、完走を果たしました。マシンは大きなトラブルはなかったものの、最後はバッテリーが持たずコース途中の充電スポットに停車しながらの走行となりましたが、無事に完走しました。

12月14日～15日
「EVフェスティバル」でソーラーカーを展示

■ グランメッセ熊本（熊本県熊本市）

この催し（主催：日本EVクラブ・くまもと、EVフェスティバル実行委員会）は、電気自動車（EV）や低公害車に対して興味を深めてもらうとともに、地球温暖化防止について考える場を提供する目的で毎年開催されているもの。本プロジェクトは、8月の「ソーラーカーレース鈴鹿」に出場したマシン「Nextage」を展示。来場者に機体の性能を紹介しました。来場者からは専門的な質問も多く、ソーラーカーへの関心の高さがうかがえました。



熊本地域プロデュースプロジェクト

地域活性 熊本

<地域活性化・観光資源の発掘>

「観光」「農業」「スポーツ」をキーワードに、地域の様々な自治体・団体と交流しながら、熊本県の地域のブランド化・活性化、地域に住む人たちの世代間交流の活性化を目指して活動しました。

プロジェクトリーダー	白澤 諒	総合経営学部 マネジメント学科 2年
サブリーダー	櫛田 厚	総合経営学部 マネジメント学科 2年
	川村 侃生	総合経営学部 マネジメント学科 2年
広報リーダー	酒井 花栄	産業工学部 電子知能システム工学科 2年
会計責任者	榎本 信矢	総合経営学部 マネジメント学科 2年

参加人数　30名

4月20日
御船町を視察しその魅力を発掘

■ 熊本県上益城郡御船町

熊本の地域の魅力を発掘しようと、メンバー10名が御船町を訪問・視察しました。商店街にある元酒蔵、恐竜博物館などを実地調査。交通の便は悪いものの魅力的な観光資源がある事が分かり今後の活動につながる視察となりました。メンバーは、観光資源をどのように活用すればよいのかを、案内役の御船町役場の職員の方と一緒に検討しました。

8月3日
「第1回御船わくわくスタンプラリー ～フネッピーを探せ～」を開催

■ 熊本県上益城郡御船町

町の魅力を発信するためには、まず御船町民が「我が町」の魅力を再発見してもらう必要があると考え、児童から大人まで世代間の交流を活発化することを目的にイベントを開催。御船高校の生徒10名もスタッフとして参加し、スタンプラリー後は御船町に関するクイズ大会などを行い、イベントを盛り上げました。参加者からも「来年も実施して欲しい」という声が多数寄せられました。

12月8日
子どもゆめ基金助成活動 「サイテク祭2013」に参加

■ 多良木町町民体育館（熊本県球磨郡多良木町）

このイベントは子ども達の科学離れが進んでいる今日、科学離れを少しでも防ぎ、楽しく科学を学んでもらおうと、同町が小学生や保育園、幼稚園などの園児を対象に開催しているもの。今回は小学生や園児に紙のおもちゃ「噛みつきヘビ」の作り方を教えるブースを設置。作業は2名から3名の参加者に対し1名のプロジェクトメンバーが指導にあたりました。子ども達は初めて作る噛みつきヘビに興味津々で、楽しそうに作業していました。

2014年1月14日
特別講演会「『のうぎょう』ってこんなにすごい!」を開催

■ 東海大学 熊本校舎（熊本県熊本市）

NPO法人九州バイオマスフォーラム副理事長のERI（大津愛梨）氏による特別講演会「『のうぎょう』ってこんなにすごい!～農業から学ぶ地域振興」を開催、阿蘇の農業から発信していく地域振興について講演いただきました。本プロジェクトは熊本の「農業」「観光」「スポーツ」をキーワードに、地域の良さとその地域にあるさまざまな観光資源のPRを目指して活動を展開。今回の講演会は、その活動の一環として初めて開催したもので、テレビ会議システムを通じて農学部のある阿蘇校舎にも配信され、約40名が参加しました。

阿蘇援農コミュニティープロジェクト

環境・農業
阿　蘇

<援農活動を通して食と農について考え農村地域の活性化に必要なことを学ぶ>

阿蘇地域での援農ボランティア活動を通して、農家が抱える問題や作業環境、農作業の現状を発信しました。

プロジェクトリーダー	高橋 啓	農学部 応用植物科学科 3年
サブリーダー	福原 久美子	農学部 バイオサイエンス学科 3年
	白石 ももこ	農学部 応用植物科学科 2年
広報リーダー	赤星 沙織	農学部 バイオサイエンス学科 3年
会計責任者	檜垣 友里	農学部 応用植物科学科 3年

参加人数　85名

4月20日
イチゴ農園で援農活動を実施

■ 熊本県阿蘇郡南阿蘇村長陽

「一人でイチゴ農園を切り盛りされている方の作業負担の軽減」という目的で6名のメンバーが実施。収穫した後の枝をそのままにしておくと次に出来るイチゴが小ぶりになってしまうため、実を大きくするための枝切、病気のいちごの除去、ハウスのビニール張替え・撤去などの作業を行いました。3日分の作業がはかどったとの評価をいただきました。

5月19日
アスパラ農家で援農活動を実施

■ 熊本県阿蘇郡西原村

アスパラ農家のハウスは約150平方メートルあり、1人で作業していることも多く、この作業軽減を目的にアスパラの摘心を行いました。摘心とは、アスパラの生長点を切ってそれ以上高くならないように親株の生え際130cmのところで切り取っていく作業です。目標よりはるかに進んで助かったとの評価をいただきました。

8月21日～27日　9月4日～10日
夏の援農活動を実施

■ 熊本県阿蘇郡・阿蘇市など

本プロジェクトでは、作物の収穫などを手伝いながら生きた知識や技術を習得するとともに、農業や農家の現状を学ぶ活動に取り組んでいます。8月は産山村、南阿蘇村で、9月は阿蘇市でトマトやアスパラガスの収穫、イチゴの苗の植え付け、除草作業などを行い、あわせて42名の学生が参加しました。

阿蘇は箱舟プロジェクト

環境・農業
阿蘇・湘南

<阿蘇地域の草原における希少動植物の生息地保全と復元>

阿蘇の草原に生息するオオルリシジミをはじめとした希少な野生生物を守るための活動を通じて、自然環境保護や種の保存・データベース化を行っています。

プロジェクトリーダー	竹田 直樹	農学研究科 農学専攻修士課程 2年
サブリーダー	舩渡 亮	農学研究科 農学専攻修士課程 2年
	前田 拓也	理学部 化学科 2年
広報リーダー	中村 香恵	農学部 応用植物科学科 4年
会計責任者	玉川 佳樹	農学部 応用植物科学科 4年

参加人数　60名

5月19日
「オオルリシジミの生息環境復元ボランティア」を実施

■ 熊本県阿蘇郡南阿蘇村

阿蘇地域は2012年の九州北部豪雨の土砂崩れによって希少な植物や昆虫の生息環境が悪化しました。現在も草原や森林の復旧が進んでいないため、今回はオオルリシジミ（シジミチョウ科の一種）に注目し、放牧が行われなくなった本種の生息地において、生息環境改善のため除草活動を行いました。阿蘇地域は、同種の全国でも唯一の一大生息地。今回はほとんどオオルリシジミが見られなくなった生息地で、食草のクララの生育を促進し、生息環境を改善するため、カヤやススキなどを約3haにわたって除草しました。

5月～6月
「希少動植物不法採集の見回りボランティア」を実施

■ 熊本県阿蘇郡

この活動は、幼虫が出る時期を中心に防犯パトロールを行うことで、オオルリシジミの幼虫やその他希少野生生物の不法採集を事前に防ぐものです。近年、採集禁止であるにもかかわらず、オオルリシジミを始めとした希少な昆虫の不法採集や、野生植物を盗掘する事案が発生しています。そこで「阿蘇地域の希少な遺伝資源を次世代に残したい」という思いから、熊本県警や熊本県などの指導の下、オオルリシジミの発生期間である5月から6月末まで見回りを行いました。

福祉除雪プロジェクト

社会貢献
札　幌

<各世代とのコミュニケーション能力を学び、社会人基礎力の育成に努める>

高齢化社会において、地域貢献として冬の除雪活動を実施。また、雪の降らない季節は高齢者にとって過酷な草刈り作業、畑作業、荷物運びの手助けを行うとともに、防犯活動にも努めました。

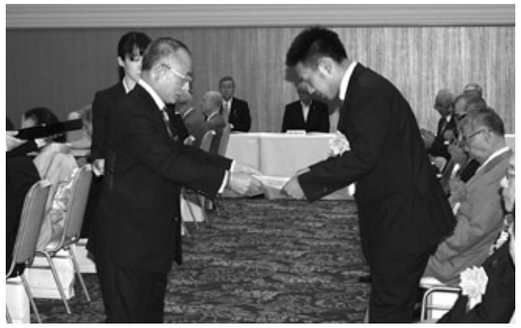
プロジェクトリーダー	水谷 大地	国際文化学部 地域創造学科 4年
サブリーダー	葭原 亮	国際文化学部 地域創造学科 4年
	島津 唯一	国際文化学部 地域創造学科 4年
広報リーダー	伊藤 舞	国際文化学部 地域創造学科 4年
会計責任者	大原 郁実	国際文化学部 地域創造学科 4年

参加人数　89名

6月28日
「防犯功労ボランティア団体賞」を受賞

■ 札幌ガーデンパレス

これは、長年にわたり防犯活動に尽力し、犯罪の防止に多大の功労があったと認められる者及び団体を表彰するもので、本プロジェクトは、高齢者宅の除雪活動等を通じ、振り込め詐欺などの防犯啓発活動を継続的に行ってきたことが評価され、今回の受賞につながりました。他の受賞者からは「若い学生が年配者に混じって表彰されており、東海大学生の行っているボランティア活動に感心した。また、どういった活動をしているか認識できた」等の感想が聞かれました。



12月3日
2013年出陣式を開催

■ 札幌校舎

北海道警察本部、道・市・区、協賛企業などの来賓を迎え出陣式を開催。6年目を迎えた今年度は学生約90名が参加。昨年度を上回る87世帯を対象として授業の合間や放課後に各世帯を訪問し、除雪活動を行います。本プロジェクトは札幌市南区藻岩地区・南沢地区の町内会会員の中から、自力で除雪が困難な世帯を対象に希望を募り、ボランティアで除雪支援に取り組んでいます。

2014年1月
本格的に除雪活動を開始

■ 北海道札幌市

札幌市南区藻岩地区・南沢地区の町内会会員の中から、高齢者の方など自力で除雪が困難な世帯を対象に希望を募り、チームを編成して対象の87世帯から依頼を受け次第ご自宅に訪問し除雪します。1月に入って積雪が多くなり、いよいよ本格的な活動が始まりました。参加した学生たちは「地域のご高齢者の方々のお役に立てる活動を行い、また、“ありがとう”の言葉が励みになりました」と語っていました。

2014年1月10日
1日警察署長を体験

■ 札幌方面南警察署（北海道札幌市）

同署と連携して実施してきた振り込め詐欺などの防犯啓蒙活動の実績により協力依頼があったもので、当日は国際文化学部地域創造学科の島津唯一さん（4年次生）と浜田和弥さん（3年次生）がメンバーを代表して1日署長として活動しました。2名の学生は警察装備品を装着して、同署の中野義宏署長から「警察の仕事は国家を守ること。その気持ちを意識して1日署長を務めてもらいたい」と指示を受け、委嘱状が交付されました。2名は地元の量販店や高齢者宅などを訪問。防犯の啓発応援活動を行いました。

チャレンジセンター所長賞

プロジェクト活動を通して社会で活躍できる優れた力を身につけ、かつ右記要件を満たした者に対して卒業時に「チャレンジセンター所長賞」を授与しています。2013年度は5校舎12名の卒業生が選ばれました。

【受賞要件】
①チャレンジプロジェクトに加入して2年以上活動した者
（継続していなくても構わない）
②プロジェクトリーダーを務めた経験がある者
③プロジェクト修了認定を2回以上受けている者
④卒業後の進路が定まっている者

校舎名	プロジェクト名	氏　名	リーダー経験年度
湘南校舎	スポーツ社会貢献プロジェクト	松田 悠希	2012
	Music Art Project	近藤 有里	2012
	環境キャラバン隊	福井 隆一郎	2012
	Tokai Formula Club	岡田 力哉	2012
	ライトパワープロジェクト	吉田 宗弘	2012
高輪校舎	Takanawa共育プロジェクト	高田 雄平	2011
		福山 祐哉	2012
熊本校舎	先端技術コミュニティACOT	板橋 大	2012
阿蘇校舎	阿蘇援農コミュニティープロジェクト	長岡 美沙紀	2012
	阿蘇は箱舟プロジェクト	竹田 直樹	2013
	あにまるれすきゅー	福田 汐梨	2012
札幌校舎	福祉除雪プロジェクト	水谷 大地	2013

チャレンジプロジェクト学科別参加人数

学　部	学　科	人数
国際文化学部	地域創造学科	39
	国際コミュニケーション学科	21
	デザイン文化学科	2
生物学部	生物学科	6
	海洋生物科学科	5
生物理工学部	生物工学科	4
	海洋生物科学科	10
	生体機能科学科	2
情報通信学部	情報メディア学科	16
	組込みソフトウェア工学科	15
	経営システム工学科	11
	通信ネットワーク工学科	13
文学部	文明学科	2
	アジア文明学科	6
	ヨーロッパ文明学科	1
	アメリカ文明学科	7
	北欧学科	4
	歴史学科	2
	日本文学科	13
	文芸創作学科	2
	英語文化コミュニケーション学科	12
	広報メディア学科	5
	心理・社会学科	6
観光学部	観光学科	21
政治経済学部	政治学科	8
	経済学科	1
	経営学科	19
法学部	法律学科	14
教養学部	人間環境学科	64
	芸術学科	140
	国際学科	60
理学部	数学科	4
	情報数理学科	2
	物理学科	23
	化学科	17
情報理工学部	情報科学科	10
	コンピュータ応用工学科	15
工学部	生命化学科	13
	応用化学科	13
	光・画像工学科	7

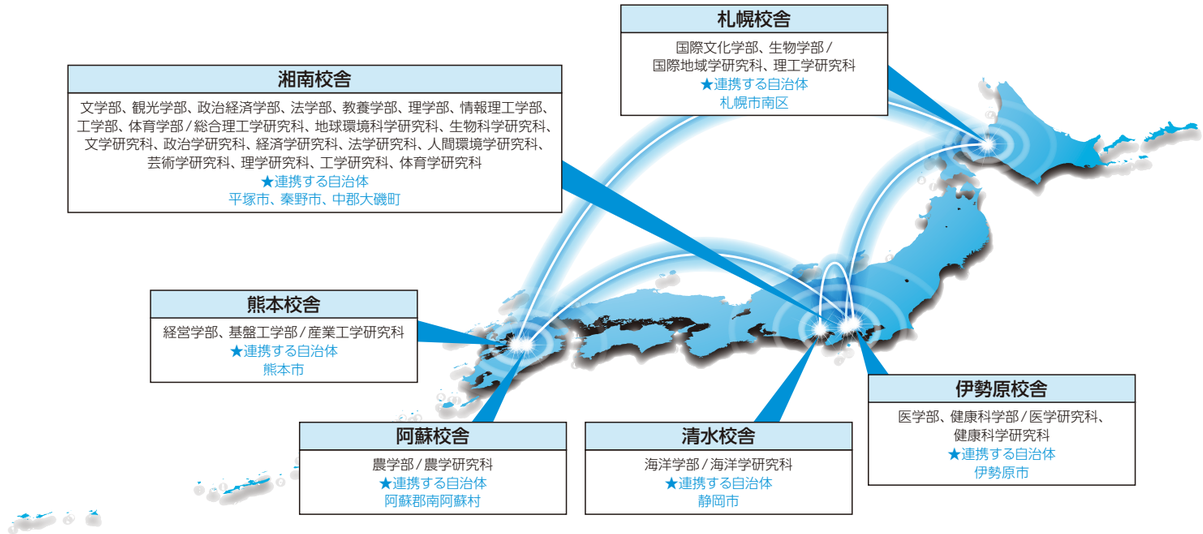
学　部	学　科	人数
工学部	原子力工学科	7
	電気電子工学科	17
	材料科学科	13
	建築学科	26
	土木工学科	8
	精密工学科	13
	機械工学科	45
	動力機械工学科	99
	航空宇宙学科	81
	医用生体工学科	25
体育学部	競技スポーツ学科	2
	生涯スポーツ学科	10
	スポーツ・レジャーマネジメント学科	45
健康科学部	社会福祉学科	5
経営学部	経営学科	2
	観光ビジネス学科	5
基盤工学部	電気電子情報工学科	11
	医療福祉工学科	4
総合経営学部	マネジメント学科	26
産業工学部	環境保全学科	3
	電子知能システム工学科	19
	機械システム工学科	18
	建築学科	4
農学部	応用植物科学科	71
	応用動物科学科	37
	バイオサイエンス学科	27
学部生　計		1,258
理学研究科	数理科学専攻	2
情報通信学研究科	情報通信学専攻	1
工学研究科	電気電子システム工学専攻	2
	応用理学専攻	1
	建築学専攻	11
	航空宇宙学専攻	7
農学研究科	農学専攻	4
大学院生　計		28
総合理工学研究科	総合理工学専攻	2
文学研究科	文明研究専攻	1
別科生　計		3
合計		1,289

※2013年7月1日現在

COC事業におけるチャレンジセンターの役割

チャレンジセンターではこれまで、正課外活動（プロジェクト活動を通して実践力を養う）と授業（プロジェクトを動かすための理論を学ぶ）を組み合わせた教育プログラムを構築し、アクティブラーニング、サービスラーニングに力を入れ、社会的実践力を身につけた学生の育成を推進してきました。また、チャレンジセンターのプロジェクト活動は、社会と繋がりを持つことを必須要件としており、東海大学によるUSR（大学による社会的責任）活動として位置づけられています。
東海大学では、チャレンジセンターの「教育・社会貢献」を中心とし、東海大学の「知・人・力」を活かした研究活動を連動させ、下記の4計画8事業を実施する「To-Collabo（トコラボ）プログラム」を策定しました。To-Collabo(トコラボ)とは、Tokai university Community linking laboratoryの略称であり、北海道から九州まで日本全国に校舎をもつ東海大学が、総合大学としての特長を生かすとともに、地域における高等教育拠点として教育・研究活動を展開する連携研究所としての役割を示す名称です。この活動は、地域特有の課題や全国共通の課題を全ての教職員・学生が共有し、協力して解決策を見出す取り組みであり、この活動を通して「大学共通教養科目の改革」を教育改革計画の中心に据え、地域連携を前提とした「パブリックアチーブメント(※1)型教育」を取り入れた全学的なカリキュラム改革と組織改革を実行していくこととなりました。
この「To-Collabo（トコラボ）プログラム」を、平成25年度文部科学省公募事業である「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業(※2)」に申請し、採択を受けました。（319件の申請のうち52 件が採択）

※1 パブリックアチーブメント…若者が社会活動を通して民主社会における市民性を獲得していく実践であり、そのための組織と学習プログラム。
※2 COC事業…「大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援することで、課題解決に資するさまざまな人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ること」を目的としています（文部科学省資料より）。



大学と地域をつなぐ4計画・8事業

共有課題① 地域の生活を充実させる	共有課題② 多世代の交流を促進する	共有課題③ 地域の魅力を発信する	共有課題④ 自然環境を守る
・地域商店街の利用者減少 ・震災・災害の対応 ・地場産業の育成、地産地消の奨励 ・伝統行事における人材不足	・少子高齢化による地域コミュニティの空洞化 ・家族レクリエーションの減少 ・地域スポーツの世代間交流 ・生涯学習の場づくり	・観光資源の発掘と見直し ・地域ブランド確立による産業の活性化 ・郷土芸能に関する情報発信および参加者獲得 ・特産物の開発・研究	・太陽光発電、熱回収、バイオマスなどエネルギーハーベスト技術の研究 ・動植物保護や地域清掃による自然資源の保全 ・5Rなどの環境啓発活動の推進 ・自然環境を利用したエコツーリズムの提案

To-Collabo（トコラボ）プログラムの推進事業（4計画・8事業）

計画Ⅰ 地域デザイン計画		計画Ⅱ ライフステージ・プロデュース計画		計画Ⅲ 観光イノベーション計画		計画Ⅳ エコ・コンシャス計画	
事業1 安心安全	事業2 ブランド創造	事業1 大学開放	事業2 スポーツ健康	事業1 地域観光	事業2 文化・芸術	事業1 エネルギーハーベスト	事業2 動植物保護

2013年度ユニークプロジェクト活動報告

障害者自立支援プロジェクト【湘南】
「秦野精華園」と協同して施設利用者の経済的・社会的自立を目指す

エコ・コンクリートカヌープロジェクト2013【湘南】
コンクリートで製作したカヌーで、大会での優勝を目指す

きらきら実験教室【湘南】
理科に関する興味や関心を高めるため、工作教室などを企画・実施する

ヒューマノイド研究プロジェクトチーム【湘南】
2足歩行ロボット大会「ROBO-ONE」で上位入賞を目指す

Same Same But Tokai【湘南】
国際NGO「Habitat for Humanity」の学生支部として活動

TOKAI DESIGN PROJECT【湘南】
「TOKYO DESIGNERS WEEK 2013」(TDW)に出展する

DAN DAN DANCE プロジェクト【湘南】
異なるダンスジャンル・年齢層と公演活動を運営する

Tokai University Health Promotion【湘南】
栄養・食生活の改善など、健康教育を推進する

HRE-Airplaneプロジェクト【湘南】
世界初の水素燃料ロータリーエンジンラジコン飛行機を完成させ、航空ページェントに出場する

ライトプレーンプロジェクト【湘南】
飛行ロボットコンテストでの優勝を目指す

橋をかけるプロジェクト【湘南】
若い世代がボランティアに取り組むきっかけをつくる

YoYoGi Leisure Frontier【代々木】
地域の魅力を発見・創出し、SNSやフリーペーパー制作を通し、連携のきっかけを探る

丹沢大山・鶴巻温泉地域の観光魅力発掘創造プロジェクト(TOTOプロ)【代々木】
観光魅力を発掘し、学生が企画からガイドまでを担う公募観光ツアーを実践する

ロボP【高輪】
ETロボコン大会での優勝を目指し、組込み技術の楽しさを伝える

CMP (Culture Messengers Project)【高輪】
日系ブラジル人社会に貢献できる活動を展開する

ワンダフル・マリンアニマルズ【清水】
魚型水中ロボットを用いて、地域行事などへの出展や講演を行う

三保活性化プロジェクト【清水】
地域の人々と協力して三保地区を活性化する

海の森プロジェクト【清水】
海藻の海をつくり、海や環境問題についての理解を促進する

夢工房【清水】
多くの人たちにものつくりの楽しさを知ってもらう

肥後のたまもの【熊本】
ウェブサイトを通じ、熊本のよさを発信し地域に貢献する

"sync"スポーツ【熊本】
スポーツでの交流を通じて生活を豊かで生き生きしたものにする

あにまるれすきゅープロジェクト【阿蘇】
不幸な犬猫を減らすため、愛玩動物を取り巻く社会情勢や現状を発信する

地域連携研究プロジェクト【札幌】
ラベンダー祭りなどのイベントや地域の魅力を生かした商品を開発する

7月7日
橋をかけるプロジェクト「第1回ボランティアバスツアー」を実施

■ 福島県南相馬市

本プロジェクトは、"人のために良いことをすることが気持ち良いと思ってもらえる"という達成目標を掲げており、ボランティアバスを出し、現地のニーズに合わせ柔軟にボランティア活動を行っています。

今回本プロジェクトは、南相馬市で、住民の依頼を受け旧警戒区域で震災復旧・復興のために活動しているボランティアセンターからの依頼で、「ビニールハウスの解体」と「家財の移動」を行いました。当日は8名が現地に赴き、2グループに分かれ活動。震災により損傷したビニールハウスを解体。また、放射能の影響により夜は人が住めない避難指示解除準備区域の住宅は、住民の方もこの場所で生活ができるか分からない状態です。そのため、住民が移動した住宅の家財は捨てると決断したため、家財の分別・移動作業を手伝いました。

7月28日
三保活性化プロジェクト「さきどり、自由研究!!」を開催

■ 静岡県静岡市 三保生涯学習交流館

今回は、科学の楽しさを知ってもらおうと小学生と園児(保護者同伴)を対象に、洗濯のり・食紅・水・ほう砂を混ぜ合わせて作る「スライム作り」と、パスカルの原理をわかりやすく体験するために、ペットボトルの中に水と浮沈子を入れてボトルを握るとどうなるかを実験する「ペットボトルで浮沈子作り」を行いました。夏休みの直前であり、自由研究の課題にもなることをPRしたところ、定員をオーバーする申し込みがあり、対応にあたるメンバー12名も大忙しでした。参加した児童からは、「楽しかった、また来年も開催してほしい。今度は違った企画に参加して、手伝いなしで完成させたい」などの感想が寄せられました。

8月11日
夢工房「ふれあい図工室」を開催

■ 静岡県静岡市 折戸生涯学習交流館

このイベントは、児童らに"ものつくり"の楽しさを感じてもらおうと、地区の生涯学習交流館を利用し、夏休みの自由研究として活用できる工作を行うものです。また、東海大学の学生として、地域の方々に海洋学部をより知っていただくための活動で、当日は園児・児童ら42名が来場しました。

今回は、手作り時計、手作りうちわ、プラ板キーホルダー、手作りホバークラフト(小型)の作り方を指導。交流館前の東海大学海洋学部校舎1号館前ではメンバーが作り上げたホバークラフトの乗車体験を行いました。手作りホバークラフトは児童らに人気、また、手作りうちわ、プラ板キーホルダーは保護者の方々に人気があり、多くの方にものつくりの楽しさを体験していただきました。来場者からは「また来年もやってほしい」「このようなイベントをどんどんやってほしい」などの感想が聞かれました。

9月7日
YOYOGI Leisure Frontier(YLF)「出張よょさんぽ」を開催

■ 宮城県女川町

本プロジェクトは、代々木校舎の観光学部生らが地域との連携を目指した活動を展開しており、地域の魅力を調べてSNSやフリーペーパーで発信する「よょさんぽ」活動に取り組んでいます。今回は、代々木での活動の成果を生かし、東日本大震災による避難生活が続く女川町の集落「御前浜」の活性化に役立てるため、イベントを通じて人々が集う機会をつくろうと企画したものです。

当日午前中は、宮城県の石巻市から御前浜までの約40キロのルートを自転車で駆ける「ツールド女川」を開催。YLFのメンバーと地元住民あわせて17名が参加し、全員が完走。正午からは同町にある旧女川第三小学校・分校の校庭で「御前浜お茶っこシンポジウム~復興の10年先のイメージを語ろう~」を開き、女川町の須田善明町長や町議会議員、女川中学校の生徒、地元住民ら約50名が参加。「復興に向けて絆を大切にしよう」「助け合っていこう」と意見を述べ合いました。その後、女川中学校の教員らによる「エンドレス・コンサート」が開かれ、交流を深めました。

9月22日
三保活性化プロジェクト「アクティブ三保~海の広場で遊ぼう!~」を開催

■ 静岡県静岡市 東海大学社会教育センター

このイベントは、本プロジェクトのメインテーマ「地域の人々と協力して三保地区を活性化する」を念頭に、地元の方に三保を再発見してもらうとともに、地域外の方に三保の魅力を認知してもらうことを目的に、海洋学部生と地元団体が協力して開催されました。今年度は清水校舎のユニークプロジェクト"ワンダフル・マリンアニマルズ""夢工房"も協力参加しました。

当日は予想をはるかに超える320名に来場いただき、三保活性化プロジェクトが火起こし体験や海のしずく(ビー玉を網目状に針金で覆った飾り物)・海のシュシュ(海に関連した色合いの毛糸でシュシュ)作成などを行ったほか、ワンダフル・マリンアニマルズがメカトロニクス実験会、ミニ水中生物ロボット作動体験、夢工房がホバークラフト体験乗車、ミニホバークラフト作りを行いました。さらには、地元団体による輪投げ、三保を知ろうよウォークラリー、キッズブレークダンスなどが催されました。次年度は、地元の方々へのさらなる出展呼びかけ、周辺宿泊施設とのタイアップなども企画したいと考えています。

9月21・22日
ロボP「ETロボコン東京地区大会」のアーキテクト部門で2位

■ 東京都新宿区 早稲田大学西早稲田キャンパス

ETロボコンは、組込みシステムの開発と工学分野の知識を深める機会を提供することを目的に開催されているものです。自律走行する2輪車を用いて、特設ステージに設置したオリジナル装置を使ったパフォーマンスの高さを競うアーキテクト部門と、走行タイムを争うデベロッパー部門に分かれており、参加者はマシンのソフトウェアを改良して競技に臨みます。

本プロジェクトは、アーキテクト部門にエントリー。ITで人と人をつなげるというコンセプトで、専用に作ったカメラを装着することで会場内を撮影し、撮った画像をコメント付きでブログにアップロードするマシンを開発してきました。本番では写真撮影には成功しましたが、インターネット環境に問題が発生したため、アップロードはできませんでした。しかし、審査員からはその斬新なアイデアが高く評価され、2位になりました。メンバーは「次は1位になり、全国大会に出場したい」と意欲を語っていました。

12月22日
海の森プロジェクト海藻の養殖に取り組む

■ 静岡県静岡市清水区 由比港

本プロジェクトは由比漁業協同組合の協力を得ながら昆布やワカメを養殖し、その二酸化炭素吸収量を計測して地球温暖化対策としての効果を調べるとともに、海藻類の活用法を研究して地域に貢献することを目指しています。12月22日には、由比漁業協同組合に加盟している漁師の指導を受けながら、養殖用の縄に昆布とワカメの種苗を結びつける作業を実施。漁師の手を借りて養殖場に垂らす作業を行いました。2月9日には収穫し、ワカメは袋詰めして同日に漁港で開催される「浜の市」で販売するとともに、ワカメ入りの味噌汁を作って来場者に提供。昆布は乾燥させた後に佃煮やジャムなどに加工し、昆布を使った新たな料理の開発などに生かします。学生たちは、「今年度は新しいレシピの開発などを通して、お世話になっている地域の方々に恩返しをしていきたい」と話しています。

プロジェクトコーディネーター・プロジェクトアドバイザー

東海大学は教員と職員による協働体制で教育支援を推進しています。その一環として、チャレンジセンターでは、プロジェクト活動の質を高め、より高度な目標を成し遂げられるよう各プロジェクトには東海大学教職員から選抜されたコーディネーターとアドバイザーを配置しています。チャレンジプロジェクトにおいては、コーディネーターとアドバイザーが必ず配置されますが、ユニークプロジェクトでは学生からの支援要請に基づきチャレンジセンターで審議の上、配置を決定します。
さらに、チャレンジセンターではプロジェクト支援に活用できるスキル向上を主な目的とした研修会や意見交換会などをコーディネーターとアドバイザーを対象に実施しています。

【2013年度 プロジェクトコーディネーター 担当者一覧】

担当プロジェクト名	氏名	所属
チャレンジプロジェクト		
病院ボランティアプロジェクト	高橋 操	チャレンジセンター推進室
スポーツ社会貢献プロジェクト	松永 達也	スポーツ課
Music Art Project	山下 直也	研究支援課
サイエンスコミュニケーター	森川 真希	技術支援課
環境キャラバン隊	平島 滋義	チャレンジセンター推進室
キャンパスストリートプロジェクト	木村 直樹	チャレンジセンター推進室
Tokai Formula Club	原田 渡	情報システム管理課
ライトパワープロジェクト	佐藤 多嘉雄	チャレンジセンター推進室
東海大学学生ロケットプロジェクト	広瀬 光明	ファシリティ課
Beijo Me Liga	梅澤 智光	湘南キャリア支援課
Tokai International Communication Club	田熊 偉良	国際課
	関野 辰夫	国際課
3.11生活復興支援プロジェクト	近藤 竜二	チャレンジセンター推進室
Takanawa共育プロジェクト	植野 一朗	高輪キャリア支援課
	渡部 真紀	高輪支援室
先端技術コミュニティACOT	下山 佳祐	熊本教学課
	福間 恵	熊本教学課
メカトロマイスター	石川 真之	熊本事務課
	六嘉 孝裕	熊本教学課

担当プロジェクト名	氏名	所属
熊本地域プロデュースプロジェクト	下山 佳祐	熊本教学課
	高倉 智之	熊本事務課
阿蘇援農コミュニティープロジェクト	高橋 誠二	阿蘇教学課
	工藤 哲也	阿蘇事務課
阿蘇は箱舟プロジェクト	金子 博	農学教育実習場
福祉除雪プロジェクト	池田 隆之	札幌キャリア支援課
	柳沢 篤寛	北海道研究支援課
	三上 早苗	
学生運営スタッフ	中西 健人	チャレンジセンター推進室
ユニークプロジェクト		
障害者自立支援プロジェクト	三橋 雅之	中央図書館図書課
CMP(Culture Messengers Project)	岩岡 隆介	高輪情報システム課
ワンダフル・マリンアニマルズ	舟尾 隆	清水教学課
三保活性化プロジェクト	鈴木 啓司	清水教学課
海の森プロジェクト	舟尾 隆	清水教学課
夢工房	舟尾 隆	清水教学課
肥後のたまもの	六嘉 孝裕	熊本教学課
あにまるれすきゅープロジェクト	神鷹 孝至	農学教育実習場
	伊藤 貴人	阿蘇教学課

【2013年度 プロジェクトアドバイザー 担当者一覧】

担当プロジェクト名	氏名	所属
チャレンジプロジェクト		
病院ボランティアプロジェクト	高原 太郎	工学部医用生体工学科
スポーツ社会貢献プロジェクト	伊藤 栄治	体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科
Music Art Project	梶井 龍太郎	教養学部芸術学科音楽学課程
	二宮 洋	教養学部芸術学科音楽学課程
	田丸 智也	高輪教養教育センター
サイエンスコミュニケーター	岡田 工	チャレンジセンター
	広川 美津雄	教育研究所
	瀧川 洋二	教育研究所
環境キャラバン隊	岩本 泰	教養学部人間環境学科自然環境課程
キャンパスストリートプロジェクト	崔 一英	チャレンジセンター
Tokai Formula Club	坂本 俊之	工学部動力機械工学科
	陳 之立	工学部動力機械工学科
	森下 達哉	工学部動力機械工学科
	佐々木 一哉	工学部動力機械工学科
	吉永 昌史	工学部動力機械工学科
	松木 誠一郎	教育支援センター技術支援課
ライトパワープロジェクト	平岡 克己	工学部航空宇宙学科
	木村 英樹	工学部電気電子工学科
	福田 紘大	工学部航空宇宙学科
東海大学学生ロケットプロジェクト	那賀川 一郎	工学部航空宇宙学科
	中篠 恭一	工学部航空宇宙学科
	森田 貴和	工学部航空宇宙学科
Beijo Me Liga	小貫 大輔	教養学部国際学科
Tokai International Communication Club	田口 香奈恵	国際教育センター
	森山 美紀子	外国語教育センター
3.11生活復興支援プロジェクト	杉本 洋文	工学部建築学科
	本田 量久	観光学部観光学科
	大塚 滋	法学部法律学科
	浅川 毅	情報理工学部コンピューター応用工学科
Takanawa共育プロジェクト	福﨑 稔	高輪教養教育センター
	佐藤 弘幸	情報通信学部通信ネットワーク工学科

担当プロジェクト名	氏名	所属
先端技術コミュニティACOT	中嶋 卓雄	基盤工学部電気電子情報工学科
	村上 祐治	基盤工学部電気電子情報工学科
	松本 欣也	基盤工学部電気電子情報工学科
メカトロマイスター	清田 英夫	基盤工学部電気電子情報工学科
	佐松 崇史	基盤工学部電気電子情報工学科
	高橋 将徳	基盤工学部電気電子情報工学科
熊本地域プロデュースプロジェクト	中嶋 卓雄	基盤工学部電気電子情報工学科
	鈴木 康夫	経営学部観光ビジネス学科
	小林 寛子	経営学部観光ビジネス学科
	宮内 順	経営学部観光ビジネス学科
阿蘇援農コミュニティープロジェクト	田中 孝幸	農学部応用植物科学科
阿蘇は箱舟プロジェクト	村田 浩平	農学部応用植物科学科
	岡田 工	チャレンジセンター
福祉除雪プロジェクト	馬渕 悟	国際文化学部地域創造学科
学生運営スタッフ	山口 勉	チャレンジセンター
	堀本 麻由子	チャレンジセンター
ユニークプロジェクト		
Same Same But Tokai	コワルスキー チャールズ ユージン	外国語教育センター第一類
DAN DAN DANCE プロジェクト	中村 なおみ	体育学部体育学科
	田巻 以津香	体育学部生涯スポーツ学科
Tokai University Health Promotion	山口 陽子	工学部生命科学科
YoYoGi Leisure Frontier	遠藤 晃弘	観光学部観光学科
丹沢大山・鶴巻温泉地域の観光魅力発掘創造プロジェクト(TOTOプロ)	屋代 雅充	観光学部観光学科
ロボP	清水 尚彦	情報通信学部組込みソウフトウェア工学科
海の森プロジェクト	鉄 多加志	海洋学部海洋フロンティア教育センター
肥後のたまもの	藤井 一郎	経営学部経営学科
	的場 英行	経営学部経営学科
"sync"スポーツ	大川 康隆	経営学部経営学科
あにまるれすきゅープロジェクト	森友 靖生	農学部応用動物科学科

コーディネーター研修

開 催	研修名	テーマ・内容	担 当	対象・人数 他
4月16日(火)	コーディネーター事務研修	①開会挨拶 ～チャレンジセンターの目指すもの～ ②チャレンジセンター2013年度 業務体制について ③コーディネーターの役割について	①梶井 龍太郎(チャレンジセンター所長) ②五十嵐 義和(チャレンジセンター推進室長) ③近藤 竜二(チャレンジセンター職員)	コーディネーター 5校舎23名
5月29日(水) 30日(木)	コーディネーター能力研修	【一日目】 ①自己紹介ワーク(スライド1枚を持参し、全体の前で自己紹介+グループ毎に自己紹介補足) ②リーダー研修の紹介 ③ワールドカフェと各リーダーの抱えている課題の説明 ④ワールドカフェ第二ラウンド 【二日目】 ①言語伝達スキルをトレーニング ～大人の説明力を身に付けよう～ ②非言語伝達スキルを学ぶ ～表情・ボディランゲージ・インプリシット～ ③まとめワークコーディネーターとして必要なこと ～合意課題ゲームを通して考える～	【一日目】 堀本 麻由子(チャレンジセンター講師) 【二日目】 園田 由紀子(チャレンジセンター講師)	コーディネーター 6校舎24名
6月5日(水)	アドバイザーミーティング	2013年度チャレンジセンター方針 ①アドバイザー事例報告 ーメンバー・およびコーディネーターとの連携についてー ②アドバイザー事例報告 複数校舎にわたるプロジェクトの可能性について	①梶井 龍太郎(チャレンジセンター所長) ②岡田 工(チャレンジセンター教員)	アドバイザー 6校舎14名
10月21日(月)	コーディネーター中間研修会	①学生会議の準備・進め方のコツ ②会議におけるコーディネーターの役割 ③ディスカッション:会議運営上、困ったこと、うまくいったこと	堀本 麻由子(チャレンジセンター講師)	コーディネーター 7校舎24名
3月14日(金)	コーディネーター・アドバイザー意見交換会	①リーダー研修会の様子やアンケート結果を踏まえ、東海大学リーダー学生の学生像について ②学生が自らの自主性や持ち味をより発揮して活動に取り組むようになるための留意点について	藤田 恵介(株式会社ラーニングバリュー)	コーディネーター・アドバイザー 5校舎43名

チャレンジセンター開講科目

チャレンジセンターは、自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力を身につけることによって建学の精神を培うという教育理念のもとで、総合大学としての多様性を活かし、学部・学科単独ではできない、社会とのつながりの中での実践的な教育を行っています。

チャレンジセンターが開講する科目には、2つの科目群（図参照）があります。

［1.社会的実践力副専攻］

目標を見つけ、計画を立て、実行する方法を体験的に学ぶための科目群（「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」「プロジェクト入門」「プロジェクト実践」など）を「社会的実践力副専攻」として開講しています。目標を見つけ、計画を立て、実行する方法を体験的に学ぶことによって、社会に出てから通用する実践力を身につけます。社会的実践力副専攻科目では、本年度も、理系教育プログラムとして、プロジェクト入門Cを画像工学科および物理学科教員と共同で授業運営しました。

［2.ジャーナリズム実践教育特定プログラム］

より高度な実践力を身につけるジャーナリズム実践教育のための科目群（「ジャーナリズム史」「メディア概論」「国際、政治、出版ジャーナリズム」など）を「ジャーナリズム副専攻」、「ジャーナリズム実践教育特定プログラム」として開講しています。公共的な価値に基づいて「情報を選別し、加工し、多くの人々へ提供する作業」を担う人材を育てます。

社会的実践力副専攻科目を受講して身につく能力

※2010年度カリキュラム改訂によって、科目名称のⅠ・Ⅱ・Ⅲという番号が、（入門）・（演習A）・（演習B）またはA・B・Cに変更となりました。

2013年度開講科目： 身につく能力

- **集い力（入門）（演習A）（演習B）：** 集団で物事に取り組むためのコミュニケーション能力
- **挑み力（入門）（演習A）（演習B）：** 状況を理解して問題を発見・解決する能力
- **成し遂げ力（入門）（演習A）（演習B）：** 目標を達成するためのマネジメント能力
- **プロジェクト入門 A・B・C：** 仲間とともに課題に取り組み実践力を身につける
- **プロジェクト実践 A・B・C・D：** プロジェクトを実践するための知識・技術を身につける

→ 社会に通用する実践力

ジャーナリズム実践教育特定プログラム

基礎となる知識	社会の動きをつかむ	取材して伝える
・メディア概論 ・ジャーナリズム史 ・マスコミ倫理	・専門分野 （政治／スポーツ／経済／科学・医療／環境／文化・出版／ウェブ） ・国際ジャーナリズムA/B ・時事問題研究A/B	・論文作法A/B ・時事英語演習A/B ・報道写真演習 ・ジャーナリズム演習A/B ・ジャーナリズム・ゼミナールA/B

→ ジャーナリストへ

社会的実践力副専攻科目の他校舎展開

チャレンジセンターでは、チャレンジプロジェクトを実施している全校舎での社会的実践力副専攻科目の開講を目指しています。これまでに、高輪校舎、清水校舎で一部科目を通常開講してきました。2012年度は、熊本校舎と阿蘇校舎を対象にしたウィンターセッションにおいて集い力（入門）を実施しました。熊本校舎では、来年度のプロジェクト入門通常開講に向けてFD※研究会を実施しました。チャレンジセンター教員による授業実践例の紹介と、今後の授業内容について検討を行いました。

2013年度は、観光学部の3、4年次生が代々木校舎に移動することに伴って、同校舎でプロジェクト入門A,Cおよび集い力（演習B）を開講しました。高輪校舎では、同校舎所属教員によるプロジェクト入門A,Bを開始しました。また、ウィンターセッションでは、熊本と阿蘇校舎を対象にプロジェクト入門A、札幌校舎では集い力(入門)を開講することになっています。

2012年度学部等研究教育補助金の報告

2012年度チャレンジセンターが独自に取り組む研究として、3件の研究が学部等研究教育補助金に採択されました。以下に研究内容の概略を示します。2012年度研究報告および2013年度研究計画についてはチャレンジセンター主催のミニセミナーにて発表がなされ、センターHPにもその内容が掲載されました（後掲参照）。

計画名：「情報端末を活用したプロジェクト型　授業内容並びに評価に関する研究」（継続）
研究者：岡田 工、崔 一英、園田 由紀子、尾崎 由佳、堀本 麻由子

2011年度に引き続き、iPadを中心とした情報端末を使った授業開発に取り組みました。新たに、スキャナを用いて紙ベースの教材を混在しながら、iPadを使った取り組みや12-308コンピュータ室に導入されたネットワーク環境下での試み、10台以上のiPadを用いた授業の取り組み等を行いました。複数iPadのデータを管理、共有する際は、iCloudのオンラインストレージを用い、毎回異なる機器を使っても情報を共有できるようにし、教員の端末管理を簡便化することができました。

計画名：「『定点観測』手法を使った実践的取材ノウハウ教育の開発」
研究者：岩田 伊津樹

ジャーナリズムの現場では、OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）型の実践教育が行われているが、大学教育として実践することは難しい状況です。そこで、気象観測に用いられる定点観測の方法を取材現場に応用した定点観測取材の手法を用いて、学生の実践的な教育を行うことが有効であると考えました。今回の取り組みでは、福島県の農家に焦点を当て、東日本大震災、原発事故により一変した生活を、その地域に暮らす1農家を中心に継続的に取材をしていくことにしました。これにより、本来、新聞社等入社後にしか体験できないOJTを一部教育的に実施することができます。この取り組みに対し、懸念される放射線の問題等は、3月15日の予備取材時に計測した放射線量によると、人体に影響を与えるレベルではなく、学生を連れて、短期間取材活動する上での安全は確保できることが確認されました。

計画名：「ルーブリック活用による目標設定・評価に関する研究」
研究者：園田 由紀子、尾崎 由佳

これまでも、チャレンジセンター科目の一部では、ルーブリックを用いた目標設定・学生による自己評価の検討を行ってきました。授業時に用いるルーブリックの適正な段階やルーブリックの記入例からみた履修学生像分析、教育目標としてのルーブリックの効果など、様々な視点で研究が行われてきました。今年度より、複数の教員により、多くの科目でルーブリックを使った事前事後測定が開始されました。科目ごとの比較や年度変化等の調査が可能になったことを受け、総合的なルーブリックに関する目標設定・評価についての研究を実施することになりました。調査は、授業開始時、終了時に行うルーブリックによる事前・事後評価の結果に加え、履修学生に向けアンケート調査を実施し、その内容から、ルーブリックによる効果・影響を検討しました。

※ FD(Faculty Development)・・大学改革や授業開発など大学教員の取り組み

チャレンジセンター開講科目

社会的実践力副専攻

チャレンジセンターは、東海大学建学の精神に基づき、2006年より、集い力、挑み力、成し遂げ力、さらには、プロジェクト型学習による総合的な実践力を身につけるための科目を開設してきました。2010年のカリキュラム改訂により、科目の目的、体系化を行い、社会的実践力副専攻を新たにスタートさせました。これにより、低年次から、実践力を身につけたいという学生が多く履修するようになりました。

■ 開講科目概要

集い力

【入門】
コミュニケーションの基本を理解し、他者との関係開始や印象形成、集団における役割獲得、合意形成の方法、自己開示など、初対面の人とチームを作り、メンバーやリーダーとなるために必要な基本スキルを学ぶ。

【演習A/演習B】
ランダムなチームを作り、設定された目標に向かい、協力しながら、実際に活動する中で、より実践的な方法で、集い力を身につける。グループでのビデオ編集や創作劇などの演習を行う。

挑み力

【入門】
無関心から脱却し、知的好奇心を自ら喚起できる能動的思考力、発想力、構想力の基礎的なスキルを学ぶ。具体的には、問題発見力、客観的思考力、多角的視点獲得、論理的思考力などを様々なトレーニング課題から学ぶ。

【演習A/演習B】
与えられたテーマや自ら発見した課題に対し、解決・改善までのプロセスをアクションラーニング理論や協働学習理論を通して学ぶ。また演習Bでは、東海大学検定作成やギネス記録チャレンジなど難しい課題に実際に挑戦する。

成し遂げ力

【入門】
夢や希望を実現するために必要な成し遂げる力は、プロセスを様々な視点からマネジメントする力である。プロジェクトの工程管理、危機管理、人々を束ね動かすチームマネジメントなど、マネジメントの基礎知識を理論とワークから学ぶ。

【演習A/演習B】
チームや組織が協働学習の中で、目標を成し遂げていくためのリーダーシップやプロジェクトマネジメントについてチーム演習を通して学ぶ。演習Bでは、キャリアやグラフィックなどの特定分野の知識を踏まえ、目標達成までのデザインを体験的に学ぶ。

プロジェクト入門A/プロジェクト入門B/プロジェクト入門C

集い力、挑み力、成し遂げ力をプロジェクト体験型で学ぶ授業。様々なテーマや課題を個人やチームで企画、達成する中で社会的実践力を養う。

【2013年度授業テーマ】
・3Dテレビについて調べよう
・プレゼンテーション・スキルUPを目指そう!
・ウォーキングを題材にした地域調査
・キャリア教育の学習支援方法を考えることで「社会的・職業的自立」を捉えなおす
・社会に貢献できるボランティアの担い手になろう
・たのしい科学教材の開発
・流星の観測をしよう
・旅行の企画

プロジェクト実践A/プロジェクト実践B/プロジェクト実践C/プロジェクト実践D

プロジェクト活動と連動しながら、プロジェクトに活かせる実践的なスキルを学ぶ授業。

【2013年度連動プロジェクト】
・ライトパワープロジェクト
・サイエンスコミュニケーターの基礎知識
・キャンパスストリートプロジェクト活動のための地域理解

■ 開講科目概要

挑み力（入門）　挑み力I※　　担当：堀本 麻由子

【授業テーマ】
学びと成長のサイクル（生涯学習のサイクル）を活用することによって目標達成に挑むことを授業テーマとしています。そのために、この授業では、学びと成長のサイクルに関わる理論と事例について発達心理と生涯学習理論の観点から考えていきます。現代のように変化の激しい時代に適応していくためには継続的な学びが必要であり、大学生以降は、自分自身で何を学ぶのかを決定し、学ぶための最適な方法を自ら選択し、学び続けていく必要があります。一方で、学び方は多様化しており、高校生までの受動的な学び方で、大学生活、社会人としての生活の中で何かに挑み、成長していくことは不可能な時代となりました。そこで今後、自分の目標にむかって挑むためにはどのような学び方が必要なのか、その学び方はこれまでの学びとはどう違い、新しい学び方の何が必要なのかを授業の中で講義や事例を通して考察することで、自らの学び方をふり返ることを授業のテーマとしています。

＜授業内容＞
・挑み力について、学びと成長のサイクルから考える
・学びと成長：発達心理学から考える
・子どもの学びとおとなの学びの違い
・学校における学び
・経験からの学び：働くということ
・経験からの学び：NPO・ボランティア活動
・生涯を通じての学び　映画から学ぶ
・生活経験からの学び：ワークライフバランスという考え方
・ゲストスピーカー：生涯を通して学び続けながら自分自身の目標に向かって挑戦する社会人の方のお話を通して学び続けることについて考えます。今年度は、NPO法人ファザーリング・ジャパン理事の東浩司さんをゲストとしてお招きし、お話をうかがいました。
・学習を支援する方法を学ぶ
・自分自身の学びをふり返る：これまでの学び方とこれからの学び方など。

挑み力（演習）　挑み力II※ ～地域に貢献できる市民力を学ぶ挑み力～　　担当：園田 由紀子

【授業テーマ】
挑み力とは、無関心にならず、様々な事柄に対し、自ら問題を発見、目標や課題を、解決、達成するためにアイディアや発想を生み出す力です。この授業では、「市民」とは何かをテーマに、講義とシミュレーション学習の双方から社会的実践力を学ぶことを目的とします。

【授業内容】
<Step1>
～多文化共生理解～多様な人たちが一緒に暮らす「社会」の理解
他文化を持つ人々が共生する架空の地域で起こる文化理解、文化教育、自治区、就労問題等）を、学生が異なる立場の住民役となって仮想会議を疑似体験（ロールプレイ）、それらの解決策を、シミュレーションの中で体験的に学びます。
<Step2>
～地域・ご近所問題を考える～コミュニティの一員として学ぶ「地域」の理解
実際に地域で起こる問題を取り上げ、どんな解決法が考えられるのかをグループで検討します。それらの問題が起こる原因をクリティカルに分析し、そこから、解決、改善につながるアイディアの創出を目指します。
<Step3>
～地域の問題を発見する～主体的市民として必要な「問題発見」「協働」「解決」を体験する
自分が関係する地域の問題を探してもらいます。それぞれが見つけた地域の問題を、グループ全員で協力し、解決・改善の方法を模索します。

架空の地域で起こる問題から、少しずつ身近な地域の問題に焦点を合わせることで、地域が抱える様々な問題の存在を知り、私たち市民が、すべてのレベルの問題に積極的にかかわっていく必要性を理解します。

【特徴と受講生の声】
毎回異なるテーマ、グループでの「仮想会議」を通して、「多角的視点」と「多様な立場」の理解を促し、改めて自分が関わる地域を見つめ、問題を発見、「市民」としての意識を持ち、課題解決のためのコミュニティの在り方、市民としての思考に気づくようなプログラムとしました。地域の問題では、「高層マンションが建設による日照権の侵害」、「地域の公園における野良の増加」「ゴミの分別に関する問題（不分別、不衛生、カラス、放火）」など、身近に起こりそうな問題を取り上げました。学生からは、「身近に感じる問題でも、いざ、自分のことのように考えてみると難しく、なかなか答えが出せなかった」「地域の問題を、地域で協力して考えなければならないことが良く分かった」「自分と異なる考えの人がいて、意見を合わせることが大変で、現実だったらどうすべきだったのか、わからない。難しい問題だった」など、市民の意識や市民としての役割を考える機会となっていた。地域の問題の発見については、「自殺の名所になっている地域があり、環境がよくない」「交通事故が多く何か対策が必要だ」「夜遅くまで騒ぐ若者がいて、騒音がひどい」など具体的な地域の問題から、「小学校のクラスが減るほど子供が少なくなっている」「高齢化によって地元の祭りがなくなった」など、少子高齢化のような大きな社会変化の影響を地域の課題から気づく学生もおり、「地域に目を向け、問題をみつける」ことの意味を理解できていました。

※は2009年度以前入学者対象の科目

チャレンジセンター開講科目

詳細はwebへ ▶ http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/kamoku.html

■ 授業での学びを高めるルーブリック　―学習コミュニティから評価コミュニティへの転換を目指して―

チャレンジセンターでは、主体的に学習活動に取り組み、自ら振り返ることを通して、実践的な能力を育成することを目的としています。目標に向け、集団で取り組む中で、「学びあい」を通じ、多くの気づきを促します。気づきを促す一つの有効な方法として、学生同士の「相互評価」があり、チャレンジセンター科目でも多く取り入れています。プレゼンテーションなど発表に対する「相互評価」では、多くの学びがあることが、これまでの研究でも確認されてきています。グループ活動におけるメンバー間の「相互評価」では、お互い様効果といわれる実情よりも他者を高く評価する偏りや自分に甘い、自分に辛いと言う相対的な価値観の差による偏りがみられることが、これまでの研究で明らかになっています。集い力I(入門)では、グループ活動後に、自己評価、メンバー評価を行い、今年度は、これらの内容について、分析を加えました。

2013年度春セメスター集い力I（入門）におけるグループ内相互評価

【相互評価の概要】

集い力I(入門)では、全4回に渡って同一メンバーによる長期間のグループワークを行っています。全グループワーク終了後、自分を含む全メンバーの5段階評価、良かった点、改善すべき点のコメントを記入させました。また、グループワークの秩序維持、グループ意識向上のため、グループ毎にグランドルールを決定させ、毎回グランドルールの達成度を評価させました。

【自己評価の結果と他者からの評価、他者への評価への関係】

自己評価の平均は、4.04となり、他のメンバーへの評価の平均4.39よりも低くなりました。これは、「お互い様効果」といわれる、自分よりも他のメンバーを褒める評価が見られたのではないかと思われます。さらにメンバーからの評価の平均は4.09と自己評価と近い数値となりました。メンバーへの評価は、標準偏差でも0.5と偏りが少なく、限りなく最高評価5に近いことから、ほとんどのメンバーには最高評価をつけていることが分かります。これに対し、自己評価で最高評価5をつけた学生は40%にとどまり、4が28%、中間点の3が25%という割合になりました。個人別にメンバーからの評価の集計では、平均は4.09と比較的高くなっていますが、標準偏差をみると、0.9とかなりのばらつきがみられました。
他のメンバーからの評価、他のメンバーへの評価については、非常に高い(平均4.5以上)、高い(平均4~4.5未満)に分けて集計し、非常に高い評価を受けていた学生は28.4%、他のメンバーに非常に高い評価を行った学生は23.1%でした。他のメンバーから平均2以下の低い評価を受けた学生は7.4%、他のメンバーへの評価が平均2以下だった学生は1.5%となりました。このことから、多くの学生は、他のメンバーに対し、高い評価を与えつつも、特定の学生に悪い評価を集中的に行っている傾向が見られました。

表1. 自己評価単純集計

自己評価点数	n	%
5	33	40.2
4	23	28.0
3	21	25.6
2	3	3.7
1	2	2.4
全体	82	100.0

表2.

	自己評価	メンバーへの評価	メンバーからの評価
平均	4.04	4.34	4.09
分散(n-1)	0.94	0.27	0.80
標準偏差	0.97	0.52	0.90

【自己評価と、他の評価との関係について】

自己評価と相関が見られたのは、メンバーからの評価、グランドルールの平均、最終成績で、最終成績では、高い相関が見られました。この結果に至った理由は、他のメンバーへの評価が、自己評価との関係よりも、他のメンバーの行動や態度など、比較的客観的に評価されている可能性を示していると思われます。また、藤原ら(2007)が指摘した「お互い様効果」では、学生が相互評価を行う場合、教員の評価と比べ適正に行われない点が指摘されていたが、今回の結果では、最終成績であったため相関が認められました。この点については、演習時に実施する振り返りに対する教員の評価との関連を分析する必要があると思われます。

表3. 自己評価と他の項目との相関比

	件数	相関比	P値	自己評価
メンバーからの評価の平均	25	0.296	0.021	[*]
他のメンバーへの評価の平均	42	0.059	0.306	[ ]
グランドルール平均	34	0.205	0.028	[*]
最終成績	48	0.272	0.007	[**]

【自分に辛い評価と自分に甘い評価】

「自分に辛い」「自分に甘い」学生の評価、評価する相手も評価者を評価する場合よくみられる高い評価を付ける「お互い様効果」について分析を行いました。自分に辛い学生は、自己評価に比べ、他のメンバーからの評価が高く、自分に甘い学生は、自己評価に比べ、他のメンバーからの評価が低い学生のことを指します。自分に辛い学生は、全体の35%、自己他者一致は37%、自分に甘いは26%と傾向がわかれました。自分に甘い学生は、平均に比べ、他のメンバーに対し、中程度の低い評価を加える割合が高くなっており、自身を客観的に評価できない傾向が見られました。また、自分に辛い評価を行う学生も、他のメンバーに対し高い評価を行う「お互い様効果」の傾向が強くみられ、他のメンバーからの評価との違いが大きくなっていました。

表4. 自己評価とメンバーからの評価の差

No.	カテゴリー名	n	%
1	自分に辛い	29	35.4
2	自己他者一致	31	37.8
3	自分に甘い	22	26.8
	不明	20	
	全体	82	100.0

2013年度チャレンジセンター科目　事例紹介と受講生の声

プロジェクト入門A・プロジェクト入門I※　担当：園田 由紀子

【授業テーマ】復興支援を考えるゼミナール～気仙沼支援を考える～

今回の授業では、津波の甚大な被害を受け、地盤沈下の影響で港の復興が遅れている気仙沼市の具体的な支援を考えます。授業では、この気仙沼に焦点を当て、ビデオ教材などを通して、「震災からの復興」、「被災者の自立支援」とは何かについて考え、気仙沼の現状について、リサーチを行い、サメの漁獲高日本一であったこと、「フカヒレ」生産日本一であったこと、ほぼすべての食品加工施設が津波の被害を受け、復興が大幅に遅れていること、フカヒレ以外の部分は安価に取引されていることなど様々な情報を集めることができました。その上で、与える支援ではなく、地域を活かした支援策が重要であると気づいた学生は、気仙沼で多く獲れるサメを使った支援を考えるようになりました。アンモニア臭が強く、食用には向かないと言われていたサメ肉のアンモニアを除去する技術(海洋学部加藤教授開発技術)を施したすり身で作った「シャークナゲット」の試食を行い、アンケート調査を実施しました。アンケート調査の速報レポートを作成し、気仙沼のすり身加工業者 株式会社ムラタ、海洋学部加藤教授にお送りし、大変喜んでいただきました。調査の結果を受け、サメのすり身に合う料理の開発にも取り組み、実際に試食まで行いました。また、株式会社ムラタから提供いただいたサメ革を使って、小銭入れ、スマホケース、靴べらなどを試作しました。商品化は達成できませんでしたが、この活動を続けたいと話す学生もおり、「復興支援の重要性」を理解してくれたことの表れではないかと思っています。

サメすり身を使ったシャークナゲット

PRチームが運営するTwitter

サメ革(シャークスキン)スマホケース作り

プロジェクト入門A・プロジェクト入門I※　担当：岡田 工

【授業テーマ】楽しい科学教材の開発

近年、子ども達の理系離れが問題とされており、子ども達への理科実験等の体験学習が注目を浴びている。そこで、小学校4年生を対象に「楽しい理科教材」をグループで考える授業を開講した。教材のテーマは、ストロー笛（写真1）、風船を使ったホバークラフト、電気パン（写真2）、空気砲、ブーメラン、手作りバター（写真3）など、グループで考えた楽しい実験テーマが集まった。発表会では、各グループが小学生でもわかりやすい実験教材を実演する。グループで、実験テーマを考えることにより、コミュニケーション能力や問題解決能力を養うことができた。学生は、理科の好き嫌いにかかわらず楽しい実験をグループで力を合わせて、発表まで準備ができていた。また、中間発表や最終発表の2回の発表をPDCAサイクルとして回転することにより、学生からの質問も多く、自ら学ぶ様子を見ることができた。自分たちが調べ、実験を成功させ、それを子供たちに伝えるというプロセスにおいて、教えることの難しさと楽しさを知ったという意見が多かった。特に今後はもっと勉強する必要性があると気づいた学生が多かった。

【受講生の声】

- 人にものを伝える難しさを学びました。また内容は面白くてもそれをうまく伝えられないといいものにならないということです。いいものにするにはしっかりとした準備が大切であるということも学びました。この授業は今後の生活においてとてもためになる授業でした。
- すごく楽しかった、の一言です。この授業で知らない人と意見を言い合い発表までもっていくことが楽しく、苦労したことも多くありましたが、自分の知らないことを学べて有意義に過ごすことができました。

（写真1）ストロー笛の実演

（写真2）電気パンの作り方

（写真3）手作りバターの発表スライド

※は2009年度以前入学者対象の科目

チャレンジセンター開講科目

■ 2013年度業績リスト

（堀本 麻由子）

・井口啓太郎・荻野亮吾・中村由香・池谷美衣子・堀本麻由子・冨永貴公：「都市型公民館における「労働」をテーマにした事業の意義と課題」日本公民館学会年報　(10) 58-67　2013年11月

・冨永貴公・池谷美衣子・高下由合・堀本麻由子：「公民館講座における学習支援者の役割：2013年度国立市公民館主催<女性の生きかたを考える講座>を通して」

『東海大学課程資格教育センター論集』第13号掲載決定済み

・堀本：マルカム・ノールズ著、堀薫夫、三輪建二監訳『成人学習者とは何か―見過ごされてきた人たち』鳳書房、2013年、第5章、付録Gの翻訳を担当

・Mayuko Horimoto, "A study on Developing the Art of Asking Questions for Leaders: Comparison with the Learning Process of Cultivating Expertise", The 12th International Conference of the Asia Chapter of Academy of Human Resource Development, Taipei, Taiwan, Nov. 7,　2013

・堀本：国立女性教育会館「ダイバーシティ推進リーダー会議」ワークショップ講師、平成25年5月18日

・堀本：国立女性教育会館「平成25年度企業を成長に導く女性活躍促進セミナー」ワークショップ講師、平成25年10月19日

（岡田、崔）

・崔、岡田：「デジタルビデオの制作を通した学び合い教育の実践」東海大学紀要、教育研究所、21号、2013年

・崔、岡田：「ウォーキングにおけるスマートフォンの活用とグループワークの実践」H25年度教育改革ICT戦略大会、私立大学情報教育協会、C-14、2013年9月

・岡田、崔、会田：「大型タブレット端末を利用したプレゼンテーション授業」H25年度教育改革ICT戦略大会、私立大学情報教育協会、B-8、2013年9月

・友野、崔：「導体紙のホール効果の測定」'13 SAS インテリジェントシンポジウム、I-9、2013年11月

・安森、岡田、崔：「ルーターを用いたホール効果実験用櫛形試料の製作」第61回応用物理学会春季学術講演会、2014年3月

■ 履修者状況一覧 開講クラス数、履修者人数は春学期・秋学期の合計

〈社会的実践力副専攻〉

校舎	授業科目名	担当教員名	開講クラス数	履修者人数
湘南	集い力(入門)　集い力I※	園田 由紀子・田中 彰吾	5	489
	集い力(演習A)　集い力II※	崔 一英	5	173
	集い力(演習B)　集い力III※	崔 一英・岡田 工	3	89
	挑み力(入門)　挑み力I※	園田 由紀子・堀本 麻由子	4	475
	挑み力(演習A)　挑み力II※	園田 由紀子・堀本 麻由子	4	180
	挑み力(演習B)　挑み力III※	大熊 亨・園田 由紀子	3	133
	成し遂げ力(入門)　成し遂げ力I※	堀本 麻由子	2	246
	成し遂げ力(演習A)　成し遂げ力II※	堀本 麻由子	4	173
	成し遂げ力(演習B)　成し遂げ力III※	広川 美津雄・谷 俊子	4	135
	プロジェクト入門A プロジェクト入門I※	堀本 麻由子・園田 由紀子 岡田 工・結城 健太郎	10	302
	プロジェクト入門B プロジェクト入門II※	崔 一英・園田 由紀子	6	186
	プロジェクト入門C	堀本 麻由子・岡田 工 楠田 淳子	3	84
	プロジェクト実践A	木村 英樹	1	9
	プロジェクト実践B	崔 一英・木村 英樹	2	12
	プロジェクト実践C	岡田 工	1	11
	プロジェクト実践D	岡田 工	1	13
合計			58	2,710
代々木	集い力(演習B)	岡田 工	1	17
	プロジェクト入門A	岡田 工	2	101
	プロジェクト入門C	岡田 工	1	38
高輪	集い力(演習A)　集い力II※	崔 一英	1	13
	集い力(演習B)　集い力III※	崔 一英	1	30
	挑み力(入門)　挑み力I※	堀本 麻由子	2	125
	挑み力(演習A)　挑み力II※	堀本 麻由子	2	50
	プロジェクト入門A プロジェクト入門I※	倉田 和夫・福﨑 稔　他	3	15
	プロジェクト入門B プロジェクト入門II※	福﨑 稔・田中 紀代子	4	96
清水	集い力(入門)　集い力1※	園田 由紀子	1	56
	挑み力(入門)　挑み力1※	園田 由紀子	1	60
	成し遂げ力(入門)　成し遂げ力I※	園田 由紀子	1	52
合計			20	653

〈ジャーナリズム実践教育コース〉

校舎	授業科目名	担当教員名	開講クラス数	履修者人数
湘南	時事問題研究A　ジャーナリズム入門I※	山口 勉・岩田 伊津樹	2	13
	時事問題研究B	山口 勉・岩田 伊津樹	2	12
	論文作法A　ジャーナリズム入門II※	岩田 伊津樹	1	2
	論文作法B	山口 勉	1	1
	時事英語演習A　時事英語演習I※	山口 勉	1	7
	時事英語演習B　時事英語演習II※	山口 勉	1	6
	報道写真演習　フォト・ジャーナリズム※	池田 正一	1	13
	ジャーナリズム演習A ジャーナリズム演習I※	岩田 伊津樹	1	4
	ジャーナリズム演習B ジャーナリズム演習II※	山口 勉	1	10
	ジャーナリズム・ゼミナールA	山口 勉・岩田 伊津樹	4	19
	ジャーナリズム・ゼミナールB	山口 勉・岩田 伊津樹	4	15
	ジャーナリズム史	飯塚 浩一	1	255
	国際ジャーナリズムA 国際ジャーナリズムI※	山口 勉	1	117
	国際ジャーナリズムB 国際ジャーナリズムII※	山口 勉	1	70
	政治ジャーナリズム	笹島 雅彦	1	124
	出版ジャーナリズム	松室 徹	1	91
	ウェブ・ジャーナリズム	稲沢 裕子	1	125
	経済ジャーナリズム	丸山 康之	1	115
	マスコミ倫理　マスコミ法制※	岩田 伊津樹	2	209
	環境ジャーナリズム	岩田 伊津樹	2	199
	メディア概論	水島 久光	1	233
	スポーツ・ジャーナリズム	川島 健司　他	1	100
	科学ジャーナリズム	笹沢 教一　他	1	139
	文化ジャーナリズム	福永 聖二　他	1	111
	医療・福祉ジャーナリズム	阿部 文彦　他	1	52
合計			35	2,042

※は2009年度以前入学者対象の科目

ジャーナリズム実践教育コース

総　論

岩田 伊津樹

2010年度に始まった「ジャーナリズム実践教育特定プログラム」が4年目を迎え、2013年度末で4名が40単位を取得してプログラムを修了した。内訳は広報メディア学科の3名と法律学科の1名で、いずれも女性だった。また、このうちの1名はジャカルタの邦字紙に就職することが決まった。

ジャーナリスト志望者を絞り込んで専門教育を行うよう設定された特定プログラムの「特専科目」では依然として受講希望者が少なく、一般科目に多くの学生が集る傾向が続いている。自分の興味にそった科目をジャーナリズム科目の中から、"つまみ食い"する学生が大多数であることを示しており、「特定プログラム」についての構造的変革が必要になっていると言えよう。

読売新聞社、中央公論新社に講師派遣を委託している「政治」「経済」「科学」など9科目では、前年度「スポーツ」「文化」に500名を超える受講希望者が殺到したことを受け、いずれも抽選を実施して150名ほどに受講者を絞り込み、各科目とも100名前後の受講者で概して順調に教育が行われた。

2014年度からは山口が専任教員を外れる。「ジャーナリズム・コース」の設置から6年が経過し、主要メディアに人材を送り込むとの当初の目的はいまだ達成されていない。コース全体が大きな改変の時を迎えている。

パイロットを囲んで（海上自衛隊厚木航空基地で）

■ ジャーナリズム講師一覧

春セメスター講師

【ウェブジャーナリズム】

稲沢 裕子	読売新聞社	調査研究本部主任研究員
西島 徹	読売新聞社	メディア戦略局
松井 正	読売新聞社	メディア戦略局
川嶋 路大	読売新聞社	メディア戦略局
鹿川 庸一郎	読売新聞社	メディア戦略局
國谷 一樹	読売新聞社	広告局
中村 文陽	読売新聞社	メディア戦略局

【政治ジャーナリズム】

笹島 雅彦	読売新聞社	調査研究本部主任研究員
笹森 春樹	読売新聞社	調査研究本部主任研究員
村尾 新一	読売新聞社	政治部
川崎 英輝	読売新聞社	世論調査部
伊藤 俊行	読売新聞社	編集委員兼調査研究本部研究員

【経済ジャーナリズム】

丸山 康之	読売新聞社	調査研究本部主任研究員

【出版ジャーナリズム】

松室 徹	中央公論新社	製作本部長
久保 孝	中央公論新社	製作部長
森本 広美	中央公論新社	商品管理部部長
石田 汗太	中央公論新社	文芸局
中田 哲史	中央公論新社	事業戦略本部長
三木 哲男	中央公論新社	婦人公論編集長
深田 浩之	中央公論新社	進行管理部部長
木佐貫 治彦	中央公論新社	中央公論編集長
佐野 泉	中央公論新社	校閲部長

【報道写真演習】

池田 正一	読売新聞社	紙面審査委員

秋セメスター講師

【文化ジャーナリズム】

福永 聖二	読売新聞社	編集委員
多葉田 聡	読売新聞社	文化部
浅川 貴道	読売新聞社	文化部
小間井 監子	読売新聞社	文化部
松本 良一	読売新聞社	文化部
前田 恭二	読売新聞社	文化部

【スポーツ・ジャーナリズム】

川島 健司	読売新聞社	運動部長
結城 和香子	読売新聞社	編集委員
若水 浩	読売新聞社	運動部
塩見 要次郎	読売新聞社	五輪担当・サッカー推進事務局長
下山田 郁夫	読売新聞社	運動部
松本 浩行	読売新聞社	運動部
三宅 宏	読売新聞社	紙面審査委員
千葉 直樹	読売新聞社	運動部
三木 修司	読売新聞社	運動部
大塚 貴司	読売新聞社	運動部
山脇 幸二	読売新聞社	運動部
谷 祐一	読売新聞社	五輪担当・サッカー推進事務局
三橋 信	読売新聞社	運動部

【科学ジャーナリズム】

笹沢 教一	読売新聞社	科学部
山田 哲朗	読売新聞社	科学部
滝田 恭子	読売新聞社	科学部
吉田 昌史	読売新聞社	科学部
安田 幸一	読売新聞社	科学部
佐藤 良明	読売新聞社	調査研究本部主任研究員

【医療・福祉ジャーナリズム】

阿部 文彦	読売新聞社	社会保障部長
田中 秀一	読売新聞社	論説委員
南 砂	読売新聞社	編集局次長兼医療部長
大津 和夫	読売新聞社	社会保障部
猪熊 律子	読売新聞社	社会保障部
榊原 智子	読売新聞社	社会保障部
林 真奈美	読売新聞社	社会保障部
小山 孝	読売新聞社	社会保障部
山口 博弥	読売新聞社	医療部
藤田 勝	読売新聞社	医療部
岩永 直子	読売新聞社	医療部
中島 久美子	読売新聞社	医療部

チャレンジセンター開講科目

ジャーナリズム実践力　教授　山口 勉　講座の1年

スマートフォンの流行で情報はさらに速報性を増しているが、一方で短いセンテンスで送られてくるニュースは一層刹那的になった。情報はたださらさらと流れているだけで若い人の思考にきちんと刻印されず、ただ彼らは情報の海の中を浮遊しているだけではないのか。そんな思いが強くなっている。
2013年度は何とかニュースを考える手がかりを与えていくことを目標に、特にゼミでは1冊の本をきちんと読ませること、中国、朝鮮半島との関係が悪化している状況の中で歴史について学ぶことを目標にすえた。
春セメスターでは、アメリカの日本学者ジョン・ダワー（マサチューセッツ工科大学教授）の『敗北を抱きしめて』（上下）の講読を行った。ダワーはアメリカ在勤時に旧知の学者で、同書は6年8か月間に及んだアメリカの占領期の歴史を描き、ピューリツアー賞を受章している。
講義では、毎週1～2章を読み、内容の抄録、疑問、感想を提出することを課題として、天皇制の問題、新憲法の制定、東京裁判、GHQの検閲・・と読み進んだ。受講者は8名だったが、毎週全員が課題を提出し、その内容からも興味が深まっていることをうかがわせた。彼らは「高校では日本の近現代史は教わっていない」と口をそろえていた。
特に憲法と東京裁判をめぐっては活発な議論が展開した。なるべく中立的な立場で、考えるヒントを与えるようつとめたが、例えば憲法の問題では、すでに定着した平和憲法を絶対に変えてはいけないとする学生は1名だけで、自信を持って自分の意見を言う学生は少なかった。
また中国との関係で尖閣列島が大きなニュースになる中で、尖閣、竹島、北方領土という日本の領土問題について、サンフランシスコ講和条約との関連で少し詳しく話をした。冷戦の深刻化による占領政策の転換の総仕上げとしての講和条約により、意図的に潜在的な紛争地として残された領土問題について解説し、日米安保条約成立前後の話をして春セメを終えた。
これを受け、学期末に全員で靖国神社の見学に行った。神社では併設された遊就館の松本聖吾権禰宜が約1時間館内を説明してくれた。後日ゼミ生の疑問を集約し、A級戦犯合祀問題や「戦死者を祀る施設になぜ兵器を展示しているのか」など質問を送ったが、結局回答は来なかった。

靖国神社で

対潜哨戒機を見る

秋セメスターでは、春と同じ受講者で歴史学者、秦郁彦の『昭和史の謎を追う』（上下）の講読を行った。春と同じやり方で毎週章を指定して抄録、質問、感想を提出させ、これを中心に講義を進めた。張作霖爆殺事件、柳条湖事件、盧溝橋事件、2・26事件、南京虐殺事件、ノモンハン事件、ゾルゲ諜報団・・と読み進んだ。
日中関係のとげとしての南京虐殺、韓国との慰安婦問題など、中国、韓国との歴史問題の核となる事件について、若い世代が判断していく基礎として、どうしても必要不可欠な知識を与えておきたいとの思いがあった。
学生は何よりも陸軍、関東軍の独走に強い印象を受けたようだった。この関連では最近の研究として北岡伸一の『官僚制としての陸軍』から三島由紀夫の『憂国』まで引っ張り出して併読させた。柳条湖事件当時の軍閥や各国の思惑など複雑な中国情勢を説明していくのには苦労した。
受講者からは「満州国を構想した石原莞爾はなぜA級戦犯にならなかったか」、「ノモンハン事件の辻正信参謀の責任を問う声は陸軍内部から上がらなかったのか」など、至極真っ当な質問が出されたが、戦後明らかになった多くの事実が当時は軍によって隠蔽されていたことを思い起こさせる必要があった。特定秘密保護法が審議される中で、軍の「秘密」がいかに危険をはらんでいるかを受講者は多少なりとも認識したのではないか。
12月海上自衛隊の厚木航空基地を見学した。基地では対潜哨戒機P-3Cを見学した後、若いパイロット2名とインタビューした。受講者たちは初めて見る軍事基地に強い印象を受けたようだった。その強い印象が彼らの中で、どういう風に熟成してくるかはわからない。ただ、平和で繁栄する日本の1つの時代が終ろうとしている中で、将来やってくるであろう日本の大きな曲がり角で、この1年間の知見が役立つことを願うばかりだ。

ジャーナリズム実践力　教授　岩田 伊津樹　講座の1年

2年目の福島定点取材

原発事故の風評被害と戦いながら生きる福島の人たちを記録しようと前年度に始めた定点取材も2年目に入り、取材を繰り返すことの意味合いが少しずつ感じられるようになってきた。

福島県・鏡石の定点取材でナシ農家から話を聞く学生

半年に一回の「定点取材」を引き受けていただいているのは、本校卒業生の栁沼志帆さん（現・日本農業新聞記者）のご実家の兼業農家栁沼一良さん方。福島のほぼ中央に位置する郡山市から車で30分ほどの農村地帯で、栁沼家では稲作のほかモモとリンゴを中心とした果樹を栽培している。福島第1原発からは約60キロである。
ゼミ生の入れ替えによって学生の顔ぶれはその都度変わるが、2014年2月で4回目となる者もおり、取材にも深みが出てきた。取材も普段の人の付き合いも同じだが、初対面の相手にベラベラと本心を打ち明ける人はいない。もしいたとしても、そんな言葉が信じられるだろうか。そこに定点取材の意味があると考えている。人間関係の構築が、取材の前提になるのはいうまでもない。生活者の声にじっくりと、しかも繰り返し耳を傾けて考える姿勢は、取材記者の原点でもある。苦難の中でも真面目にコツコツと生活を築き上げていこうとする人たちから学ぶものは多い。
2013年9月4日から6日までの間実施した第3回定点取材では、栁沼家にお願いして果樹園で農作業を体験させていただくとともに、近隣農家に取材範囲を広げて現状を聞いた。
まず前回訪問（2013年3月）後の状況について、一良さんの妻の千津子さんからお話をうかがった。前年夏は、リンゴの木が枯れるほどの干ばつだったが、13年は順調に育っているとのことだった。しかし収入の中核になっている米は、農協まで軽トラックに載せて運び全袋検査する。自前で積み下ろしをして往復を繰り返す重労働だ。野菜や果実類は種類ごとに1キロずつ砕いて持って行くが、オクラなど軽いものは採算が取れないため出荷を断念した。
一方、取材した3軒の近隣農家の方たちは、キュウリ、イチゴ、梨をそれぞれ栽培している。訪れた9月初めは、繁忙期がようやく峠を越した時期だったが、どのお宅も風評被害で表情はさえない。その中の一人の女性は、町内の仲の良い知人に収穫したばかりの果実を持って行くと、「福島の物は食べない」と突っ返されたという。生々しい話に学生たちの表情もこわばった。
間もなく早生種のリンゴが収穫の時期を迎える時期で、果実に日光をよく当てるための葉っぱ取りの作業を短時間だったが手伝った。果樹園のリンゴの木は300本。普段はこの気の遠くなるような作業をほとんど千津子さん一人でやっている。何気なく口にするリンゴにも、農家の人たちの苦労がしみ込んでいると実感した。

裏を取る取材

インターネット世代の現代の学生にとって、何かを調べるのはパソコンに向かってキーをたたく作業と考えているようだが、特ダネといわれるような最先端のニュースを追うには、現場での裏づけ取材が欠かせない。
2013年7月11日、当時、新聞で騒がれていた「脱法ハウス」を取材した。問題会社の社長が、自宅を脱法ハウスにしていると新聞には書かれている。その裏を取ろうというわけだ。
どこから手をつけるのか。まず、問題の会社がある新宿に行き、法人登記を管轄の新宿法務局で上げる。その役員欄を見ると、社長の自宅が中野区内にあるのがわかった。電車を乗り継いでその住所地に足を運ぶ。新聞によれば、この社長宅の一部が脱法ハウスに改築されているというが、空き家になっていて内部を見ることはできない。さらに中野の法務局で社長宅の登記簿を挙げて購入時期や抵当権の設定時期などを詰めてゆく。
新聞記者は聞いたことをそのまま書き飛ばしていると多くの学生は考えているようだが、社会部記者は、こうやって一つひとつ事実を固め、つまり裏づけを取りながら原稿を書いて行く。学生にこれをやらせてみて裏取りの苦労を体感するのがねらいだ。この日は猛暑の一日だったが、ある参加者は「裏を取るという言葉はよく聞くが、こういうことなのかと初めてわかった」と話した。
思いがけない『発見』もある。12月の徳洲会事件の不動産登記を調べる演習の際、藤沢市のモーガン邸を取材していた学生が、ついでにその登記も調べてみたところ、戦後の一時期、有名な実業家の所有になっていたことがわかった。東京駅前の丸の内ビルディングなどを手がけたアメリカ人建築家の邸宅をめぐる物語のあまり知られていない余白の部分だった。実際に現場に足を運び取材をしなければ味わえない新たな事実を知る醍醐味。プロであろうと学生であろうとその味は変わらない。

登記簿による裏取り取材で、関連病院の写真を撮るゼミ生たち

FD研究会

詳細はwebへ ▶ http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/

2013年度 第1回合同FD研究会
2010年度カリキュラムにおけるリメディアル科目

日時：2013年8月28日(水) 15:00 ~ 16:50　場所：東海大学湘南校舎 12号館 12-1会議室

(1) 数学系基礎教育の変遷と今後

（理学部・数学科　前田 陽一）

2010年度カリキュラム変更に至るまでの経過と効果から、今後のリメディアルのカリキュラムを展望する。今回は微積分のリメディアル科目を中心に説明する。微積分のリメディアルでは、旧カリキュラム時代は、週2回の4単で、かなり内容的にはハードなものとなったため、2002年頃から、春、秋、授業開始第1週目の毎日5時限目に全員を対象に補習を開講した。しかしこの補習では、補習を受講してもらいたい学生が必ずしも受講しないという事態が起こった。2010年のカリキュラム改訂では、負担が大きいことから4単位を2単位にし、工科の微積分Ⅰ、Ⅱ、さらに、補習の部分を基礎数学A、基礎数学B、各1単位として開講した。この基礎数学Aには、微積分が含まれておらず、基礎数学Bから微積分が含まれる。基礎学力の低い学生は、微積分以前の基礎的な数学を学び、その後微積分の基礎を学んでから、工科の微積分Ⅰに進むこととし、能力別、習熟度別クラス編成を導入した。習熟度別クラスにしたことにより、教えやすくなるなど良い点も多い反面、成績をつけにくい、さらに、レベル下位の学生を中心とした問題とするため、問題が優しくなりすぎるという課題が出てきた。その後、基礎数学AとBをまとめ、微積分を含んだリメディアル数学とした。この科目の履修該当者は各学科の基礎学力テスト下位20%程度を対象とし、約400名の底上げを目指し、学科横断的に開講した。来年度から試行的に工学部のいくつかの学科で、40名程度の小規模クラスでの開講を実施する。これ以外に、工科の微積分Ⅰ、Ⅱと発展的な積み上げ科目が展開され、これらの中でテーラー展開など、高度な数学を含みつつ、2単位にすることとした。このようなに、リメディアル教育は、限られた時間の中で工学部の学生として必要な数学を教えるため領域を絞る必要が出てきた。ただし、学科によって必要な領域が異なることも踏まえ、カバーする範囲について、検討が必要であると思われる。また、リメディアル科目の履修該当者の適正な割合についても再度検討する必要がある。

最後に、来年度に試行的に開講する予定のリメディアル数学の内容について説明があり、微積分とは何かなど、基本を、端的に学ぶことができるように工夫されていた。

(2)リメディアル科目としての基礎物理A・Bの現状と今後

（理学部・物理学科　藤城 武彦）

工学部、理学部を中心に、リメディアル科目の科目内容、カリキュラムの狙いなどが報告された。2003年から2008年まで物理、化学、数学の補習授業（単位なし）を開講していたが、Sナビの登場後、補習授業が終了した。その後、2010年カリキュラム改訂で物理基礎A、基礎Bという科目がスタートし、質点の力学、剛体の力学、熱力学、電磁気学、加えるなら原子力学を範囲とした。リメディアルの基本となるのが基礎物理Aであり、物理の基礎の最も優しい部分をピックアップして教えている。基礎物理学Bでは、それぞれの難易度をあげたもの、剛体の力学や原子物理を含めたものなどがある。高校の物理では、原子物理が入試範囲が含まれていないので、勉強していない学生もおり、高校の復習として開講している。今年度は基礎物理Aは9学科、基礎物理は6学科で開講され、基礎Aは8クラス、基礎Bは2クラス開講し、概ね1クラス80~90名程度の履修者であった。授業では、ワークシートを使い、講義があり、学生は穴埋め部分等を埋めながら、レジュメを完成させる形で進めている。後半、教科書からの問題を使って演習を行っている。学生自らで考えさせ、その後解説をしながら進めるため、あまり多くの演習を行うことができない。最後に、自力で問題に取り組み、提出させる課題を設けている。出題は授業中に取り扱ったものを中心にする。この課題の内容を評価している。基礎物理Bでも同様の流れで進めているが、途中ではビデオ、デモ実験を入れながら、学生の興味を喚起するように配慮している。その後、演習に参加し、最後に課題に取り組んでいる。成績評価は、毎回の課題が8割、途中レポートで2割で行っている。リメディアルの効果として、GPA下位の学生たちの上昇が目立つ、一定の効果がみられた。問題点としては、2010年以降履修者が増加しているが、中には高校時代に物理を学んできたリメディアルの必要のない学生も含まれており、特にこれらの学生の授業態度が悪く目立つことから、履修指導についても検討が必要である。さらに、週1の授業で高校物理のリメディアルとして十分なのかについて検討する必要があるのではないか。また、リメディアルという性格から、課題への取り組みを中心に評価を行ってきたが、実力をつけるという意味でも、中間テスト、期末テストを実施する必要があるのではないかなど運営についても検討の余地があることが説明された。さらに、特に習熟度の低い学生について、Sナビとの積極的な連携を進め、フォローしていく体制を作る、基礎学力テストの物理版を使ってリメディアル授業の履修者の選抜方法を確立するなど、様々な課題が示された。

(3)工学部原子力工学科におけるリメディアル科目

（工学部・原子力工学科　浅沼 徳子）

原子力工学科で取り組んでいるリメディアル科目について報告があった。原子力工学科では、数学と物理のリメディアル科目を設置している。数学は、1セメで、リメディアル数学、工科の数学1、2セメで、工科の数学2、物理は、1セメでリメディアル物理、物理学基礎、3セメ以降で力学1、力学2を設置している。リメディアル科目とは言え、習熟度が低い学生に対しては、学科教員が個別に毎週補修を実施している。リメディアル数学、リメディアル物理は、習熟度別クラスとし、入学時の基礎学力テストでの得点40点を目安として、履修を勧めている。GPAの変化をみると、リメディアル科目を履修した学生の成績が向上していることがわかり、リメディアル科目の効果が見て取れる。学科としてのリメディアルへの取り組みとしては、再履修や学力の低い学生には個別に指導を行い、履修後もケアを続けている。単位を取ることだけが目的ではなく、より高評価を目指す指導を行っている。

(4)情報理学部コンピュータ応用工学科におけるリメディアル科目

（情報理工学部・コンピュータ応用工学科　稲葉 毅）

まず、新カリキュラムの主な変更点として、入門ゼミナールや創造工学演習、習熟度別クラスの理工系基礎科目の新設、履修指導などが説明された。中でも、習熟度別クラスの分け方として、基礎学力テストに加え、学科独自で作成し、新入生研修会で実施している基礎数学確認テストを用い、3つのクラスに分けている。成績上位のグループは、リメディアル履修不要とし、ついで、リメディアルで大まかな復習が必要なクラスB、高校数学の基礎からのリメディアルが必要なクラスCの3グループである。特にグループCについては、リメディアル科目の履修時期等についても指導を行っていることが報告された。さらに、コンピュータ演習、マルチメディア演習等のいくつかの科目では、授業内のミニテストなどを使ってクラス分けを行い、習熟度別に授業を開講している。近年の基礎学力テストの平均点を見ると、上昇傾向にあるものの、得点分布、標準偏差の推移を見てみると、学力のバラつきが増えていることがわかる。入試の多様化に伴い、AOや推薦入試で入学する学生に低学力の学生が目立つ。このため、数学の基礎学力テストの得点ごとに履修不要、基礎数学上位クラスクラスB、基礎数学下位クラスのクラスCの3つのグループに分け、クラスCの中でも、特に得点の低い学生には、微積分の履修を見送り、基礎数学に集中するように指導している。クラスCの学生の特典推移を見ると、学習の効果が見られることがわかる。また、特に基礎学力テスト30点未満の学生のGPA、取得単位数も上昇が見られる。さらに成績上位者を表彰する取り組みやコンテストの実施などを通じ、成績下位者の底上げでなく、上位者のモチベーションの維持にも取り組む必要がある。

(5)“「気付かせる」リメディアル教育”ー チャレンジセンター科目　「挑み力」の事例から

（チャレンジセンター　園田 由紀子）

チャレンジセンターでは、学生の学習意欲の低下に注目し、授業内で様々な取り組みを行ってきた。

チャレンジセンター科目の挑み力入門では、困難な課題に取り組む発想力を育成することを目的とした科目だが、近年、困難なことを避ける学生の増加に対し、「なぜ、困難を避けるのか」「なぜ、意欲わかないのか」を考えさせ、気づかせることにより、学習意欲の換気を促してきた。具体的には、困難を避ける思考の中に、「どうせやってもできない」「失敗したら嫌だ」など、負の経験により学習した無力感（学習性無力感）の影響があることや自己効力感と言われる「できる」という感覚の有無などが学習意欲に大きく影響することに気づくための機会を設けた。また、中間テストの振り返りを通して、自らの学習態度を振り返らせる取り組みも行った。

中間テストでは、人の記憶の構造について、記憶の定着と復習の関係や忘却のシステムなど講義時に使ったプリントを範囲とした。テストでは裏面に、テストの得点予測、その根拠、配布プリントを配られてから、テストまでの勉強の過程、このテストで気づいたことなどを振り返らせた。この振り返りでは、授業中に理解したつもりでも勉強をしなければ記憶できないことや自身の学習態度、テスト結果の原因理解など様々な気づきが促され、「日常的な学習態度の重要性」について考えさせることができた。さらに、レポート課題のような締切にまでに提出しなければならない課題を事例として取り上げ、自身の学習目的や学習方法等を振り返らせる課題を行った。これは、架空のレポートを設定し、そのレポートに取り組む場合、自分がどのような行動、考え方をとるかを、レポート課題を書き始める前（事前）、書いている間（遂行）、書き終えた後（事後）の3つの段階に分けて記述させた。その上で、この方法で書かれたレポートはどのような評価を得られるかを振り返らせた。学生の多くは、計画的にレポートに取り組むことがなく、直前になって、インターネットの情報や友人と協力して、〆切までに指定の文字数を埋めることを目標として作成していた。さらに、提出したあと、反省等をすることはなく、提出すれば、単位が取れると考えていることがわかった。架空レポートの評価をさせてみると、多くの学生はCやEといった低い評価を付け、本人も改めて考えてみると、このようなレポートでは評価が得られないことに気づくことができた。では、どうしたら良い評価を得られるレポートがかけるのか、3つの段階ごとに考えさせてみると、良い高い評価を得るレポートの作成方法について考えることによって、納得のいく評価が得られなかったのは、実力や運ではなく、自分の努力と方法に問題があったことを知ることができる。このように、基礎的な学力をつけることだけがリメディアルではなく、学習意欲の向上や自らが勉強する姿勢を振り返ることもひとつのリメディアルとして位置づけることができるのではないだろうか。

2013年度 外国語教育センター 情報教育センター合同FD研究会
アクティブラーニングに活用できるICTについて~電子黒板・クリッカー活用の可能性と課題~

日時：2014年1月11日(土) 13:30~16:30　場所：東海大学湘南校舎 14号館104視聴覚教室

【第1部 電子黒板・クリッカーの活用事例について】

(1)情報教育センターでの活用事例と付属高校での活用について

（情報教育センター講師　坂田 圭司）

付属中高校でのICTの活用や大学でのICTの利用状況などを踏まえ、報告があった。この中で、取り上げられていた付属高校へのアンケート調査の結果では、すべての教室に電子黒板が設置されている学校もあれば、プロジェクターの設置も限られている学校もあり、差が見られたことが報告された。そのような中でも、生徒、学生でのスマートフォンの普及は広く進み、ネットからの情報が身近になる中、情報教育の観点からも、教室のICT化を進め、メディア・リテラシー教育などの充実を図るべきであるとの報告があった。

(2)外国語教育センターでの活用事例について

（外国語教育センター第一類講師　ロバート・アッシュクロフト）

英語教育における電子黒板の利用について報告された。教科書から電子黒板用の教材を作成し、テキスト、スライドショーなどを用いてリスニング、ディスカッションなどの活動を行う一連の流れをデモンストレーションを行いつつ説明した。また、スマートフォンやQRコードの授業における使用法も紹介した。動画、画像を組み合わせた授業の紹介では、スクリーンに映し出した映像からイメージしたものを学生から答えさせ、電子黒板機能を使って、ヒントを書き加えながら、学生の興味を喚起しながら、理解度に合わせ進められていた。ICT技術によって、「次はどうなるのか」「何が出てくるのか」興味を持たせることができ、スムーズに動く画面に多くの人が集中していた。特徴的だったのは、パソコン画面のプロジェクター投影画面と電子黒板画面を切り替え、さらにプロジェクターをインターネットに接続させ、ネット上の画像を組み合わせながら、授業が進められていた点でした。それぞれの機能を踏まえ、効果的な活用を組み合わせることで、流れるように授業が進められており、会場のオーディエンスからも、歓声が上がった。

【第2部 電子黒板、クリッカーの活用可能性と課題】

(1)クリッカー技術の紹介と活用事例

（株式会社内田洋行）

2013年度導入予定機材　educlick（エデュクリック）HEについて、開発メーカーの内田洋行の担当者様より、デモンストレーションを含めて、ご発表があった。本クリッカーシステムは、学生一人一人がリモコン型のクリッカーを持ち、クリッカーを使って授業に参加できるシステムで、コンピュータ1台で管理ができ、レシーバーを差すだけで、ネットワーク等も必要なく、セッティングが非常に簡便でありながら、最大数千人の情報を同時に使用が可能なものである。さらに、このクリッカーの活用事例としては、パワーポイントを使い、問題を作成、画面に提示ができ、その問題に対し、設定された選択肢をクリッカーによって入力すると、瞬時に、回答回収、正解の表示がされた。さらに、誰がどのような回答をしたのかなど、エクセルのアドインソフトを使い、集計確認することができ、成績等への反映も簡単にできることが説明された。さらに、教員

FD研究会

用のクリッカーでは、画面の操作も可能で、教員が画面に張り付くことなく、自由な環境で教育が行え、学生が授業に積極的に参加しやすくなると説明された。中でも、学生の授業への理解度を確認する際に、このシステムは有効で、確認テストや理解度に対するアンケートに用いることで、授業中に、学生の理解度を図り、そのフォローができることで、教育効果の向上に繋がると説明された。
会場からは、「このシステムは、どこでも好きな教室に移動ができるのか」「最大どれくらいの人数まで対応できるのか」「学生のひもづけはどのように行うのか」などの質問があった。教室移動は、物理的には可能だが、クリッカーの台数によっては、相当の重量になり、管理の観点からも教室毎での利用が望しいとの回答があり、最大利用人数については、過去1,000名以上で利用したことがあるが、物理的には2,000名程度でも可能であること、ひもづけについては、学生に指定したクリッカーを持たせることで可能になるが、基本的にはクリッカーの個体番号ごとの情報集約にとどまっている旨回答があった。

(2)アクティブラーニングにおけるクリッカーの利用可能性…チャレンジセンター

（チャレンジセンター講師　園田 由紀子）

アクティブラーニングでは、クリッカーを使った意見表出だけでなく、グループ内での活発な議論や協働作業による体験に基づいたまなびが重要となっている。さらに、新たな気づきを促すためには、普段とは異なる新たな環境に身を置くことで、自身の新たな一面を引き出すことも多い。チャレンジセンターで開講されている科目は、全学部、全学年が履修し、100名を超える多人数となる場合も少なくない。このような中、授業で行うアクティブラーニングは、全員が同時に参加するものだけでなく、グループで行うもの多くなっている。アクティブラーニングでは、客観的なメンバー間の相互評価が重要となるため、毎回異なり、知り合いのいないグルーピングが理想とされている。しかし、同一人数のグループを作るためには、出席者をもとにグルーピングを行う必要があり、授業開始時に出席者を把握する必要がある。さらに、複数回グループワークを行う場合、メンバーの重複を避けることが望ましく、これらを教員の手で授業中内に行うことは、困難を極める作業になっている。通常は、くじ引きを使ったグルーピングや学生の主体性に任せる場合などが多いが、くじ引きの場合出席者の人数に合わせてその場で作成、調整する必要が有り、教員の負担が大きく、学生の主体性に任せると友人、知人が固まりやすく教育効果の点で問題が多くなりやすい。今回取り上げるクリッカーに学生認証システムを組み込むことで、コンピュータに出席データをいち早く取り込み、そのデータを元にランダムなグルーピングを行うことで、これらの問題が解決されるだけでなく、客観的に行うことが難しいメンバー間の相互評価についても、直接伝えにくい評価でも、クリッカーを使うことで、相互に評価できる可能性がある。このように、アクティブラーニングでは、グルーピング、グループ内での相互評価での活用が期待される。

(3)一般教室で行う情報教育におけるクリッカー利用可能性…情報教育センター

（情報教育センター講師　白澤 秀剛）

アクティブラーニングを用いた教育が望まれている背景として、近年の学生の特徴、企業が求める人材像のギャップについてデータを使った説明があった。アクティブラーニングは、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るものと定義されていることが示された。目標とされる学習には、問題解決を目指し、体験・調査に基づいたまなびを、グループ・ディスカッションやディベートなどグループ・ワークを用いて共有する探求型学習と、レポートやディスカッション、討論、プレゼンテーション、宿題／課題、発問／質問、ピア評価などによる活動型学習があり、これらをどのようにICTを活用して効果的に行うかが課題となっている。ここで提案された方法は、このようなアクティブラーニングを15回ある授業の1回か2回に導入する、1回の授業の中で10分～15分導入するなど、スポット的に活用し、より学習効果を高める。さらに、学びの姿勢を作るために活用する、知識の定着率を向上させるために活用するなど、学習態度の構築や振り返りにおいてアクティブラーニングを活用することが望ましい。加えて注意すべき点として、「面白かった」という評価を目指さない、初めての体験による集中と、ALの効果による集中を誤解しないことなどが挙げられ、その上で、クリッカーを授業導入や理解度の測定、学生の集中力向上や学生への理解を深めるものとして活用することが望ましいのではないかという報告があった。

(4)語学教育及び関連科目におけるクリッカー利用の可能性…外国語教育センター

（外国語教育センター第二類講師　結城 健太郎）

語学教育における有効な活用法について、具体的な事例を含めご報告があった。外国語教育センターでのアンケート調査に基づき、外国語関連科目におけるクリッカー使用の現状と可能性について報告した。現在、クリッカーはほとんど使用されていないものの、語学科目での授業内活動の道具として、また多人数の受講者を抱える講義科目や問題演習を中心とした検定対策科目などでの理解度確認手段として使用可能性が示され、興味を持つ教員が多いことが分かった。語学教育では、ただ単に単語の意味を確認するなどの暗記補助としてではなく、文法理解やイディオムの習得などを理解できているか、指定した語句の並べ替え問題など授業全体の理解度を図る、TOEICなどの検定試験に向けたトレーニングでの活用が有効ではないかなどの、様々な活用について報告された。

【第3部 電子黒板・クリッカーの活用可能性と課題についてディスカッション】

ディスカッションでは、参加者からの質疑応答とフリーディスカッションが行われ、質問だけでなく、様々な意見も多くあり、活発な議論がなされた。

（コメント1）
高機能だが、同時に高価な機材を少数導入するよりも、機能が限定されていても安価で大量導入が可能なものを多数導入したほうがよい。
(マーク・シュロズブリー　外国語教育センター第一類准教授)

（コメント2）
高価で少数しか導入できないが、高機能な機材を使用することにより、実験的な試みが可能になり、開発者へのフィードバックが可能になり、教育機器の開発に貢献できる。
(結城 健太郎　外国語教育センター第二類講師)

（コメント3）
アシュクロフト講師の発表により、一号館に導入された電子黒板が外国語教育において有効に活用されており、その活用範囲が今後大きく広がる可能性が示された。一方のクリッカーについては、まだその認知度は低いものの、語学関連科目でも使用可能であることが結城講師の発表により示された。パネルディスカッションでは、様々な科目の教師、教育の専門家、企業関係者、技術者が集まることにより、教師の要望について、技術的な限界や可能性が示されるなど、活発で有意義な議論が可能になった。

ミニセミナー

詳細はwebへ ▶ http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/

2013年度 チャレンジセンター第1回ミニセミナー

日時：2013年6月19日（水）16:30 ～ 18:00　場所：東海大学湘南校舎 15号館4階第一会議室　参加者　チャレンジセンター教職員約15名

【第1部】2012年度 チャレンジセンター学部等研究補助金助成研究報告

情報端末を活用したプロジェクト型授業内容並びに評価に関する研究そのⅡ

岡田 工、崔 一英、堀本 麻由子、園田 由紀子、尾崎 由佳

グループワークなどを中心としたプロジェクト型授業における、情報端末を使った研究について報告された。これまで、プロジェクト型授業でプレゼンテーションを行う場合、模造紙や書画カメラを用いることが主であった。また、パソコン教室を活用した場合でも、プレゼンテーションソフトを使って個々人が資料作成や発表準備をするため、グループワークとして教育効果を高めることができなかった。そこでiPadを用いることで、一般教室においても、情報検索、簡単なプレゼンが行えるようになり、模造紙等に比べ、動画や写真などを使った効果的なプレゼンテーションをグループワークの一環として行うことができるようになった。実際の授業では、約10台ほどのiPadを用い、グループごとに簡単なプレゼンテーション作成させた。複数iPadのデータを管理、共有する際は、iCloudのオンラインストレージを用い、毎回異なる機器を使っても情報を共有できるようにし、教員の端末管理を簡便化した。特に、効果的だったのは、グループ討議をベースにした共同作業が可能になったことである。これまでは、グループワーク等を多用するため、一般教室で行うことが多かった。これは、学生同士が顔を突き合わせ、討議をし、共同作業の中で、コミュニケーション能力の育成などを行うためであった。反面、効果的な教育機会の一つであるプレゼンテーションでは、デジタルコンテンツを用いることが一般化し、準備は、パソコンが中心になった。そのため、ソフトを使った発表を行う際には、授業時に一般利用可能なパソコン室に移動して作業を行うか、パソコン教室でグループワークを含む授業を行うほかなかった。パソコンを使うことで、メンバー全員での共同作業は難しくなり、特定の学生の負担を増やすに留まる傾向が見られた。これに対し、iPadを用いた授業取り組みでは、グループで1台の機器を囲み、相談しながら作業を進めることができるため、学生の参加意欲も向上した。現在の環境では、iPadで利用可能な簡易的なアプリを使った作品作りにとどまるが、今後は、マイクロソフト社のアプリ用のオフィスの発売が予定されており、情報端末を使ってパソコンと変わらない作業が可能になる。さらに、アプリを独自に開発することで、授業での活用が広がることが予測される。

「ルーブリック活用による目標設定・評価に関する研究」

園田 由紀子、尾崎 由佳

これまで、チャレンジセンターでは、ルーブリックによる評価の方法について検討を行ってきた。
2012年度教育研究所の紀要に投降した論文をもとに報告を行った。今回の研究では、授業の事前、事後にルーブリックを使った学生による自己評価の変化から、ルーブリックの効果、評価の活用可能性について検討した研究である。今回の調査では、尾崎先生が実施された事前、目標設定、事後の3点評価の比較を行う方法を中心に検討を行った。結果、学生の自己評価をもとにしていることから、客観的な成長を読み取るための評価指標としてではなく、自身が成長出来たという自己成長感をより具体的に意識させるための手がかりとしての活用有効性については言及することができた。また、今回の研究から、具体的な教育内容とルーブリックの変化に関連が見られたことから、経験や学習を反映させることの可能性を見ることもできた。具体的には、授業内で、重点的に丁寧に学習した部分については、ルーブリックでの変化から、成長感が高い項目として有意差が認められ、反面、授業であまり触れることができなかった項目については、大きな変化をみることはできなかった。この点からも、具体的な教育内容とルーブリックによる変化に相関関係が見られることから、経験による自己成長を図る手法としてはルーブリックの有効性を示すことができた。しかし、これらは、あくまでも学生による自己評価であるため、これがそのまま学生の成長を客観的に図るものではないことを言及する。これについては、査読でも指摘を受け、客観的評価ということは難しいことが明らかになっている。これに対し、園田が行っている授業開示に事前の自己評価を行い、授業終了時に事前での評価を見ながら事後評価を行う手法では、尾崎先生の方式に比べ明らかに上昇率が高くなる。これは、事前のポイント、状況を示されることで、授業を通して成長しているはずだという自己バイアスや成長していなければならないという意識に基づき、起こる変化と考えられる。園田の方式では、評価レベルよりも、示されたレベルに対するコメントに注目するもので、事前を示すことで、自己成長感をより具体化できる効果を持っていることがわかった。例えば、授業開始時は、人見知りで友達以外と話すことに抵抗があると書いていたが、授業終了時には、友達ではない人にも話しかけられるようになったなど、具体的な成長を考える手がかりとして使うことができる。

【第2部】2012年度学部等研究補助金応募研究発表

スマートフォンを活用した授業内容の構築

岡田 工、崔 一英

近年、スマートフォンの普及により、多くの学生が持つようになった。これまでも、iPadを使ったグループワークだけでなく、スマートフォンのアプリを使ったウオーキングのデータ収集など、様々な情報端末を活用した授業の取り組みを行ってきた。さらに、iPad miniなど、タブレット端末の小型化、高性能化が進み、さらに、学生所有のスマートフォンの拡大を踏まえ、これらを有効に活用した授業展開の可能性が高まった。そこで、これまでのiPadなどの情報端末を用いた取り組みをさらに発展させ、特にスマートフォンに注目をした授業開発を試みる。具体的には、独自のアプリの開発や既存のアプリの新たな活用を踏まえた授業内容の構築の研究を行う。すでに、グループワークを活かした理科実験教材の開発として日本情報科学教育学会での発表を予定し、さらに私立情報教育学会で、岡田、崔、それぞれ1件ずつの発表を予定している。予算はiPod touchを使ったwifi接続にかかる費用やiPad mini、Android系情報端末、ネットワークスキャナ、モバイルパソコンの購入費用を予定している。

広告媒体物（ポスター・チラシ・パンフレット・フリーペーパー）

ライトパワープロジェクト

スポーツ社会貢献プロジェクト

サイエンスコミュニケーター

3.11生活復興支援プロジェクト

Takanawa共育プロジェクト

先端技術コミュニティACOT

熊本地域プロデュースプロジェクト

運営スタッフ

病院ボランティアプロジェクト

Music Art Project

チャレンジセンター

環境キャラバン隊／サイエンスコミュニケーター

キャンパスストリートプロジェクト

Tokai International Communication Club

チャレンジセンター

広告媒体物（ポスター・チラシ・パンフレット・フリーペーパー）

チャレンジセンター

ニュースリリース（湘南校舎）

月　日	内　容
4月	**ライトパワープロジェクト**　ソーラーカー「東海チャレンジャー」がトミカとして商品化
5月	**キャンパスストリートプロジェクト**　「わくわくさんぽ」を開催
	病院ボランティアプロジェクト　絵本「できるもん!!～おくすりマンとこびとさんのおはなし♪～」を制作　Webサイトで公開・配布
6月	**3.11生活復興支援プロジェクト** 「東北ココロむすぶプロジェクト in 鎌倉」で東北地方（岩手県大船渡市、福島県西白河郡西郷村）の物産を販売
7月	**ライトパワープロジェクト**　東海大学ソーラーカーチームが「出前授業」を実施
	ライトパワープロジェクト　「エコカー教室」を開催
	東海大学スポーツ教育センター　地域の小学生を対象とする参加型スポーツイベント「2013 ちびっこサマーフェスティバル」を開催
8月	**3.11生活復興支援プロジェクト**　岩手県大船渡市「どんぐりハウス」において「電子工作教室」を開催
	ライトパワープロジェクト　「ワールド・ソーラー・チャレンジ」参戦車両および参戦体制発表会
11月	**「環境キャラバン隊」&「サイエンスコミュニケーター」**　「水の循環」をテーマに「環境教室」を実施
	To-Collabo市民セミナーならびに**チャレンジセンターセミナー**　「富士山世界遺産登録－その背景と経緯－」を開催
	病院ボランティアプロジェクト　ワークショップ「病棟ボランティアの可能性～入院患者さんにボランティアは必要なのか～」を開催
	「ロマンティックキャンパス」を開催
1月	**スポーツ社会貢献プロジェクト**　「第6回東海スポーツDAY」を開催
2月	**Music Art Project**　東日本大震災復興チャリティーコンサート「NEVER GIVE UP ～今、私たちにできること～」を開催
3月	**病院ボランティアプロジェクト**　第11回セミナー「うつ病の境界～あなたの大切な人は大丈夫?～」を開催
	ライトパワープロジェクト　地域の小学生を対象とする「ものつくり教室・実験教室」を開催
	環境キャラバン隊　「理科教室」を開催
	東海大学学生ロケットプロジェクト　「ハイブリッドロケット打ち上げ実験」を実施

メディア一覧

プロジェクト	月　日	分類	掲載メディア
ライトパワープロジェクト	4月15日	新聞	毎日新聞
	4月16日	Web	時事ドットコム
	4月16日	Web	MSN産経ニュース
	4月16日	Web	MSN産経ニュース
	4月16日	Web	朝日新聞デジタル
	4月17日	新聞	朝日新聞
	5月29日	雑誌	Motor Fan illustrated
	5月31日	新聞	タウンニュース
	5月1日	雑誌	Vector Journal
	6月24日	新聞	朝日新聞
	6月26日	新聞	房日新聞
	7月10日	新聞	日刊工業新聞
	8月10日	雑誌	THE21
	8月28日	Web	Car Watch
	8月28日	Web	Yahoo News
	8月28日	Web	Yahoo News
	8月28日	Web	Yahoo News
	8月28日	新聞	日経産業新聞
	8月28日	TV	テレビ神奈川
	8月28日	Web	読売新聞
	8月28日	Web	カナコロ
	8月28日	Web	日刊工業新聞
	8月28日	Web	レスポンス
	8月28日	新聞	東京中日スポーツ
	8月28日	Web	毎日jp
	8月28日	Web	環境ビジネスオンライン
	8月28日	Web	日経BPNET
	8月31日	新聞	タウンニュース
	9月16日	雑誌	モノ・マガジン
	9月21日	ラジオ	エネルギー最前線ミライレポート
	9月22日	ラジオ	EVENING BUZZ
	9月25日	TV	ひるまえほっと
	9月26日	雑誌	CARトップ
	9月31日	雑誌	MotorFan
	10月4日	新聞	ntnews.com.au
	10月7日	新聞	THE JAPAN TIMES
	10月7日	新聞	ABC NEWS
	10月7日	Web	Business Wire
	10月8日	Web	SOLAR NOVUS TODAY
	10月9日	新聞	ABC NEWS
	10月10日	Web	TBS News
	10月10日	Web	NHKニュース
	10月10日	Web	スポーツ報知
	10月10日	Web	時事ドットコム
	10月10日	Web	FUKUI SHINBUN ONLINE
	10月10日	Web	gooニュース
	10月11日	Web	パナソニック
	10月15日	Web	IRニュース
	10月16日	新聞	毎日新聞
	10月16日	TV	ワールド wave トゥナイト
	10月16日	Web	solar reviews
	10月21日	Web	Alternergy
	10月23日	Web	SOLAR jouanal
	10月24日	Web	NHK WORLD
	10月30日	Web	PRESIDENT Online
	10月1日	書籍	トミカ大集合2014版
	10月1日	雑誌	山野だより 50周年記念行事特集号
	11月1日	雑誌	日経Automotive Technology
	11月24日	新聞	神奈川新聞
	11月30日	新聞	テレビマンユニオンニュース
	11月30日	TV	テレビ金沢
	12月10日	書籍	トミカコレクション2014 超ひみつゲット!

プロジェクト	月　日	分類	掲載メディア
ライトパワープロジェクト	12月12日	書籍	グリーンパワーブック
	12月1日	雑誌	Slovak Journal : VOLT
	1月6日	雑誌	JSTnews
	1月9日	新聞	聖教新聞
	1月14日	Web	日経トレンディネット
	1月16日	新聞	日刊スポーツ
	1月17日	TV	おはようゴーちゃん
	1月19日	TV	この後、挑戦!オーストラリア縦断3000キロ 世界最高峰ソーラーカーレース 完全密着ドキュメント
	1月19日	TV	挑戦!オーストラリア縦断3000キロ 世界最高峰ソーラーカーレース 完全密着ドキュメント
	1月19日	TV	いま世界は
	1月21日	新聞	読売新聞
	1月22日	新聞	アルカリージュ新聞
	2月14日	ラジオ	福井謙二 グッモニ
	2月20日	書籍	力・エネルギーを考える
	3月1日	書籍	CROWN English Communication II 教師用指導書　題材資料編
		その他	Fotovoltaico di nuova generazione
		その他	デイリーサビックス
サイエンスコミュニケーター	7月15日	Web	サンケイリビングWEB
	11月24日	新聞	神奈川新聞
東海大学学生ロケットプロジェクト	8月31日	新聞	北羽新報
3.11生活復興支援プロジェクト	6月14日	Web	タウンニュース
	6月14日	新聞	タウンニュース
	8月23日	TV	おばんです いわて
	8月27日	Web	岩手日報webNEWS
病院ボランティアプロジェクト	6月6日	新聞	神奈川新聞
	6月20日	新聞	朝日新聞（朝日新聞デジタルにも掲載）
	7月11日	新聞	タウンニュース
Music Art Project	1月30日	Web	朝日新聞デジタル
	1月30日	Web	@nifty旅行
	1月30日	Web	excite
	1月30日	Web	livedoor地図情報
	1月30日	Web	ぴあこどもと遊ぼう
	1月30日	Web	パナソニックおでかけ旅ガイド
	1月30日	Web	スポットサーチ
	1月30日	Web	アパホテル
	1月30日	Web	まちこみZAQ
	1月30日	Web	学研キッズネット
	1月30日	Web	Walkerplus
	2月18日	新聞	河北新報
	2月19日	新聞	河北新報
	2月20日	新聞	河北新報
環境キャラバン隊	11月24日	新聞	神奈川新聞
キャンパスストリートプロジェクト	6月15日	新聞	タウンニュース
	7月13日	新聞	タウンニュース
	12月10日	新聞	神奈川新聞
阿蘇は箱舟プロジェクト	5月20日	新聞	熊本日日新聞
	5月21日	Web	読売新聞
	6月8日	Web	朝日新聞デジタル
	8月15日	Web	TOKAISM
DAN DAN DANCEプロジェクト	10月10日	新聞	タウンニュース
	10月14日	新聞	タウンニュース
福祉除雪プロジェクト	4月11日	情報誌	どうしん生活情報誌「札歩路」
	12月4日	新聞	毎日新聞
	12月　日	情報誌	広報札幌
	1月23日	新聞	札幌新聞
チャレンジセンター	9月17日	雑誌	大学の約束
	10月14日	新聞	タウンニュース

2013年度活動一覧

4月

月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4	5	6 [湘]TICC：Tomodachi Study Support(TSS) ～2014年1月10日まで	7
8	9	10	11	12	13	14 [湘]ライト：アメリカ大使公邸にて交流
15	16	17	18	19	20 [湘]ライト：東海チャレンジャーがトミカとして商品化 [熊]熊本地域：御船町視察 [阿]阿蘇援農：援農活動	21
22	23	24	25	26	27	28 [湘]スポ社：親子で運動あそび
29	30					

5月

月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4	5 [湘]サイエンス：伊勢原市立子ども科学館25周年フェスティバル [湘]スポ社：秦野こども祭り/子どもフェスタ
				[湘]BML：マルチカルチャーキャンプ		
					[湘]C. A. P.：湘南フラガーデン	
					[高]共育：高輪のれん/市	
6	7	8	9	10 [札]福祉除雪：「安全・安心まちづくり」道民の集い	11	12
					[湘]TFC：ソープボックスダービー	
13	14	15	16	17	18 [熊]ACOT：ETロボコン技術教育	19
					[高]共育：浅草三社祭の参加	
20	21	22	23 [湘]MAP/復興支援：スプリングチャリティーコンサート	24	25 [湘]C. A. P.：ウォークラリー	26 [熊]熊本地域：マチナカレッジ
				[湘]MAP/復興支援：東北ツアー		
27	28	29	30	31		

6月

月	火	水	木	金	土	日
					1 [湘]TFC：SHCCミーティング	2
						[湘]TSRP：29th ～
3	4	5	6	7	8 [湘]復興支援：物産展	9
[湘]TSRP：29th International Symposium on Space Technology and Science 展示参加						
10	11	12	13	14	15 [湘]復興支援：物産展 [湘]スポ社：子ども大会 [熊]ACOT：ロボットサマースクール	16
17	18	19	20	21	22 [熊]ACOT：ロボットサマースクール	23 [熊]熊本地域：御船町恐竜博物館・御船町商店会スタンプラリー
					[湘]復興支援：応急空間ワークショップ	
24	25	26	27	28	29 [湘]C. A. P.：清掃活動 [湘]TFC：エコパ試走会	30 [熊]メカトロ：レスキューロボットコンテスト神戸予選

7月

月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4 [熊]ACOT：WRO技術支援	5	6 [湘]サイエンス：「科学喫茶 これであなたも保存の達人!?～知ってトクする保存の科学～」 [湘]ライト：ソーラーカー&セーフティ教室 [熊]ACOT：ロボットサマースクール(合志教室)	7
[湘]病ボラ：病棟ボランティア活動						
8	9 [湘]MAP：サマーコンサート	10 [湘]ライト：エコカー教室 プロジェクト協議会	11 [熊]ACOT：WRO技術支援	12	13	14 [湘]BML：フェスタジュニーナ [高]共育：桂坂を花いっぱいにする会
[湘]病ボラ：病棟ボランティア活動						
15	16	17 [高]共育：桂坂を花いっぱいにする会	18 [熊]ACOT：WRO技術支援	19	20 [湘]TFC：エコパ試走会 [湘]TSRP：UNISEC総会への参加	21 [湘]スポ社：第15回 ちびっ子サマーフェスティバル
[湘]病ボラ：病棟ボランティア活動						
22	23	24	25 [高]共育：落語寄席 [熊]ACOT：WRO技術支援	26	27	28
29	30	31				

8月

月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3 [熊]熊本地域：第1回御船わくわくスタンプラリー ～プネッピーを探せ!!～	4 [湘]ライト：ものつくり教室（人力飛行機班）
				[熊]メカトロ：ソーラーカーレース 鈴鹿出場		
5	6 [湘]サイエンス：付属中高生のための理科教室	7 [湘]復興支援：電子工作教室	8	9 [湘]病ボラ：癒しのイベント	10 [熊]ACOT：世界一行きたい科学広場	11 [高]共育：テニススクール
	[湘]TFC：富士試走会				[湘]サイエンス：星の学校	
	[湘]BML：つくばキャンプ					
12	13	14	15	16	17	18
[湘]サイエンス：星の学校					[湘]TSRP：能代宇宙イベントハイブリッドロケット打上実験	
					[湘]復興支援：復興ステーション	
					[湘]サイエンス：サイエンスリンク	
19	20	21	22	23	24 [湘]環キャラ：あやせ環境展	25
[湘]TSRP：能代宇宙イベントハイブリッドロケット打上実験						
			[湘]復興支援：キャンドルナイト			
26	27	28	29	30 [湘]TICC：翰林日本語学校訪問	31	
[湘]TSRP：能代宇宙イベントハイブリッドロケット打上実験				[湘]ライト：テストフライト（人力飛行機班）		

9月

月	火	水	木	金	土	日
						1
2	3	4	5	6	7	8 [高]共育：テニススクール
[湘]環キャラ：夏期キャラバン（北海道）						
	[湘]TFC：第11回全日本学生フォーミュラ大会					
					[高]共育：高輪神輿渡御	
9	10 [湘]環キャラ：夏期キャラバン（東林小学校）	11 プロジェクト協議会	12	13	14 [熊]ACOT：ETロボコン2013九州地区大会	15
[湘]環キャラ：夏期キャラバン（北海道）					[湘]TSRP：宇宙開発フォーラム2013	
16 [湘]サイエンス：サイエンスフェスタ2013 in ちの	17	18 [湘]2014年度チャレンジプロジェクト応募説明会	19	20	21	22
23/30	24 [湘]2014年度チャレンジプロジェクト応募説明会	25	26	27	28	29
					[湘]復興支援：石巻にてイベント	

10月

月	火	水	木	金	土	日
	1 [湘]TSRP：東京国際航空宇宙産業	2	3	4	5	6 [湘]ライト：WSC大会
				[湘]ライト：人力飛行機テストフライト		
7	8	9 プロジェクト協議会	10 [湘]TICC：TSS支援開始	11 [札]福祉除雪：道民集会への参加	12	13
[湘]ライト：WSC大会				[湘]ライト：人力飛行機テストフライト		
14	15	16	17	18	19	20
				[湘]BML：マルチカルチャーキャンプ2013		
					チャレンジプロジェクト中間報告会	
21	22	23	24	25 [湘]病ボラ：広報誌発行	26 [湘]スポ社：みなとこどもの家 大野こどもの家	27
28	29	30	31			

11月

月	火	水	木	金	土	日
				1 建学祭	2 [湘]TICC：建学祭ツアー	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13 プロジェクト協議会	14	15	16 [湘]スポ社：伊勢原フェスティバル	17
18 チャレンジセンター セミナー	19	20	21	22 [湘]C. A. P.：幼稚園訪問	23 [湘]環キャラ/サイエンス：みずほ小での環境教室 [湘]サイエンス：世界一行きたい科学広場2013	24 [湘]復興支援：物産展
25	26	27	28	29	30 [湘]病ボラ：基調講演・ワークショップ	

12月

月	火	水	木	金	土	日
						1
2	3	4	5	6	7	8 [湘]MAP：湘南ひらつか 第九のつどい [熊]熊本地域：サイテク祭
9	10	11 [湘]病ボラ：癒しのイベント プロジェクト協議会	12 [湘]MAP：Holy night magic ～聖なる夜への贈り物～	13	14	15
16	17 [湘]TICC：ASEANユースシンポジウム～若者が語る多文化共生～	18	19	20 [高]共育：キャンドル教室	21 [湘]クリスマスU-night：科学イベント	22
23/30	24/31	25	26	27	28	29
[札]福祉除雪：除雪活動 12月末～3月まで						

1月

月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10 [札]福祉除雪：1日警察署長	11	12 [湘]スポ社：第6回東海スポーツDAY
13	14 [熊]熊本地域：「のうぎょう」ってこんなにすごい!～農業から学ぶ地域振興	15	16	17	18	19
				[湘]ライト：UAEアブダビでのソーラーカー展示（ソーラーカー班）		
20	21	22	23	24	25	26 [熊]ACOT：Green ET Challenge 2013
[湘]ライト：UAEアブダビでのソーラーカー展示（ソーラーカー班）						
27 [湘]病ボラ：平成25年度「学生ボランティア団体支援」（主催：一般財団法人学生サポートセンター）に採択	28	29	30	31		

2月

月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5 2013年度プロジェクト最終報告会	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
					[湘]ライト：川崎国際環境技術展(ソーラーカー班)	
17	18	19	20	21	22 電気自動車・燃料電池車・ソーラーカー製作講習会―持続可能なモビリティ社会の実現に貢献する―	23 [湘]MAP：東日本大震災復興チャリティーコンサート「NEVER GIVE UP ～今、私たちにできること～」
			リーダー研修			
24	25 [湘]チャレセン：2013年度プロジェクト最終報告会	26	27	28 [湘]TFC：TF2014シェイクダウン		

3月

月	火	水	木	金	土	日
					1	2 [湘]ライト：科学技術教室
3 [湘]環キャラ：春季キャラバン	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
[湘]TSRP：第12期冬期打上げプロジェクト						
17	18	19	20	21 [湘]C. A. P.：精華園訪問	22	23
[湘]TSRP：第12期冬期打上げプロジェクト						
24/31	25	26	27	28	29	30

ライト：ライトパワープロジェクト
復興支援：3.11生活復興支援プロジェクト
TSRP：東海大学学生ロケットプロジェクト
TFC：Tokai Formula Club
スポ社：スポーツ社会貢献プロジェクト
サイエンス：サイエンスコミュニケーター
BML：Beijo Me Liga
TICC：Tokai International Communication Club
MAP：Music Art Project
病ボラ：病院ボランティアプロジェクト
環キャラ：環境キャラバン隊
C.A.P.：キャンパスストリートプロジェクト
共育：Takanawa共育プロジェクト
ACOT：先端技術コミュニティACOT
阿蘇援農：阿蘇援農コミュニティープロジェクト
あにまる：あにまるレスキュープロジェクト
福祉除雪：福祉除雪プロジェクト
熊本地域：熊本地域プロデュースプロジェクト
メカトロ：メカトロマイスター

[湘]…湘南校舎　[札]…札幌校舎　[高]…高輪校舎　[熊]…熊本校舎　[阿]…阿蘇校舎